

## Ⅱ. 検出遺構の報告

### 1. 西院地区の調査

西院伽藍は天平19年の法隆寺資財帳において西院伽藍のみを記し、東院とは区別されている。現在では、現東大門所在地から西方の伽藍域を西院とよび、その中心部を西院大伽藍ともいう。西院地区は、回廊に囲まれた、いわゆる大伽藍と、それに付属する東室、綱封蔵、食堂などの一郭、現大宝藏殿域、大宝藏殿の門の西側広場と、東大門と西大門を結ぶ参道南側の子院群から構成されている。今回の概報でも、それによって報告しよう。ただし、実相院門の北側、大宝藏殿前広場から見出された若草伽藍関係の遺構については説明の便宜のため別項とする。説明はおおむね、北から南へと進める。

#### A 食堂・東室北側地区（第1・2・3図）

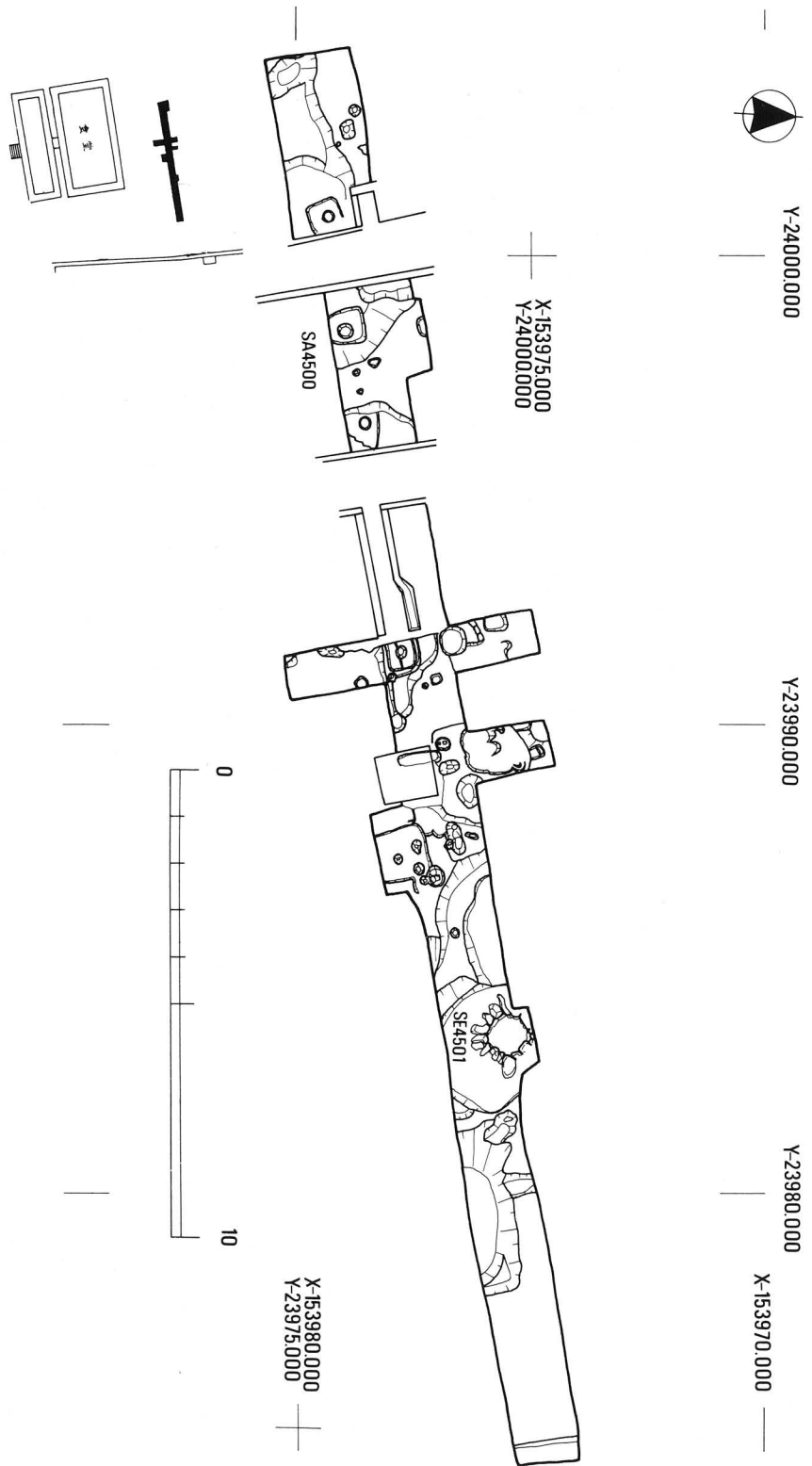
この地区は、大宝藏殿の表門から北へ進む道路があり（この途中に参詣者用手洗い所がある）、北へのびて不浄門にあたる。この道路から西側、西院回廊までの間には、弥勒院、知足院、宝蔵院があったが、現在はすべて撤去され、広場となり、県文化財保存事務所、旧金堂解体修理事務所（現発掘調査事務所）、寺の作業所などが仮設されている。ここの東面にトレンチを設けた。食堂の裏側広場には、食堂解体修理の時に仮設された製材所の基礎工事が残されていたので、発掘調査はやや手間どった。なお、食堂の西北の県作業所の南側のトレンチは、土堀との間に配管されることもあって、幅70cmしか掘れなかった。

i 食堂裏の第230トレンチ 金堂の昭和の大修理に伴う製材所の基礎コンクリートが地下に大量に残されており、発掘調査は困難を伴った。しかし、柵列(SA4500)、井戸(SE4501)、瓦質土管排水溝(SD4502)、中近世の土壌(SK4503～4505)を検出する事ができた。

SA4500 金堂に並行する東西4間以上の掘立柱列（掘形1辺0.7m、柱痕直径24cm）である。柱間は等間ではなく2.0～2.4mで、建物にまとまる可能性は薄い。土層観察および遺物から西院創建以降、平安初期までに建築されたもので、おそらく食堂（資財帳にいう政屋）との関係のある柵（あるいは影壁風の堀）であろう。

SE4501 トレンチ東部で検出した直径2.7mの掘形をもつ円型石組井戸（直径0.8m、深さ4m以上）である。井戸埋土から多量の瓦片、土師灯明皿、瓦器、陶、磁器が出土した他、「法隆寺 弥勒院」の銘のある軒丸瓦が出土した。破片であるうえ瓦当面が剝離しているため年代ははっきりしないが、中世の瓦である。江戸時代初期の法隆寺境内古図によれば、この地は弥勒院にあたり、また文献では室町時代の建立とされている。出土した遺物からも室町時代から近世まで機能していた井戸であると言える。

SD4502 トレンチ中央の北拡張区で検出した瓦質土管排水溝である。瓦質土管（直径11cm、長さ18cm）はわずか3本検出したのみであるが、整地土に埋め込まれ、レベル値によると東



第1図 食堂北トレンチの遺構図



第2図 食堂裏の発掘，左・トレンチ東半分(西から)，右・トレンチ西半(東から)230トレンチ

から西への流れであつたらしい。室町時代後半のものである。

SK4503～4505 とともに瓦器・羽釜・灯明皿・瓦片を出土する土壌である。

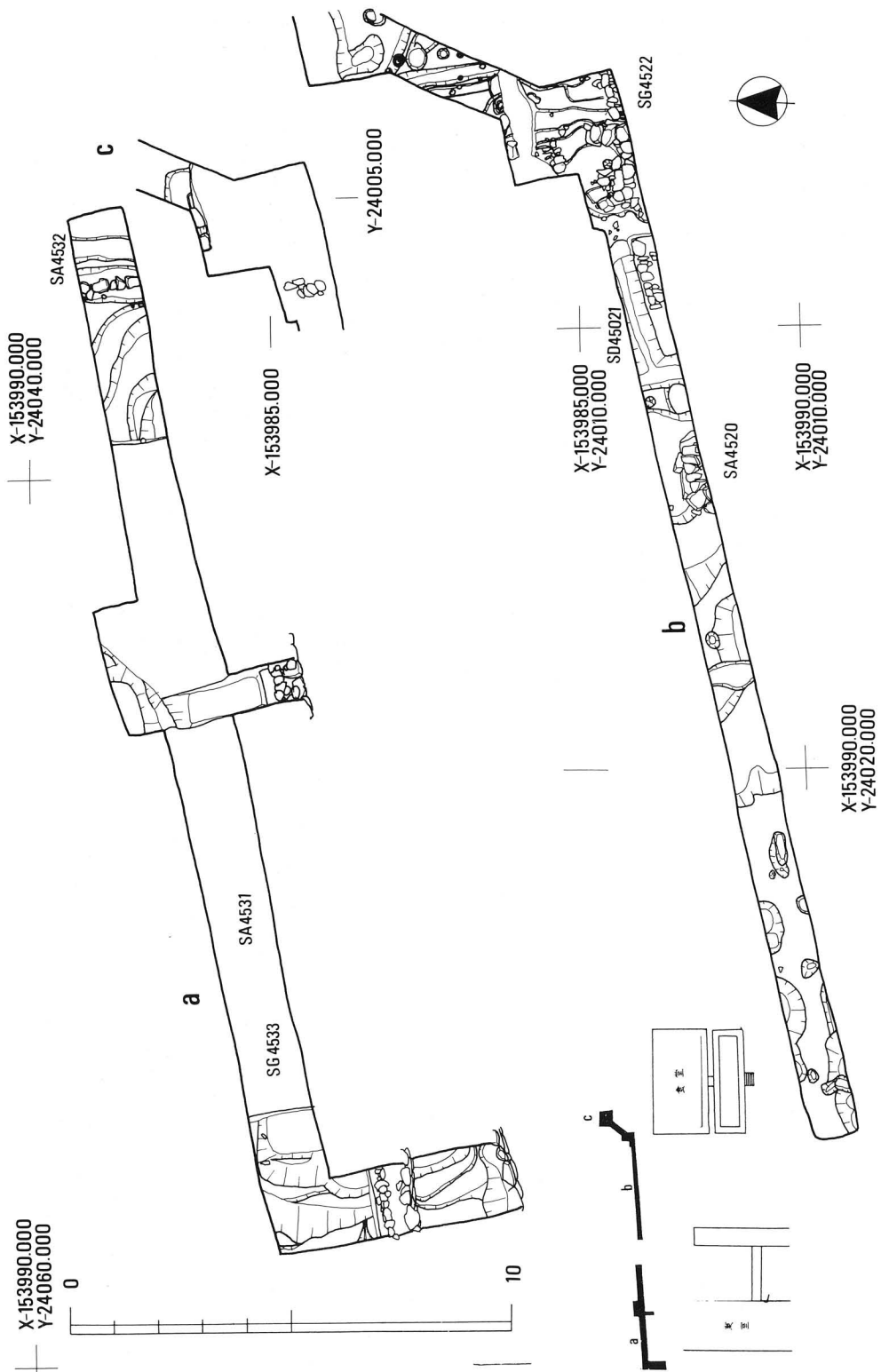
その他，多数の小穴を検出したがすべて中近世の遺構で，室町時代から明治11年まで存在していた弥勒院関係遺構であると言える。

ii 第234トレンチ 旧知足院土堀と現県修理事務所作業所の間を設定されたわずか0.7m幅のトレンチである。築地基礎(SA4520)，東西溝(SD4520・4521)，小沼地(SG4522)，その他中世の土壌を検出した。

SA4520 現築地から1.2m北でこれに先行する築地基礎を検出した。地表下20～30cmで検出し，面を北にする平石が部分的であるが連続して残存していた。染付碗等が出土している近世の遺構である。

SD4521 SA4520の直下で検出した東西溝である。SA4520に並行して東西に延びるが，土層観察によるとSD4521が埋ってSA4520が築かれており，SA4520の雨落溝にはなり得なかった。SD4521は，トレンチ東部下層で検出した中世の溝である。

SG4522 トレンチ東端部はちょうど知足院と弥勒院との境界部にあたる。複雑な遺構の状態で検出されたSG16は，知足院側の旧築地基礎と同レベルの石敷から子院の境界部に斜めに瓦質土管による排水溝が延び，この先端に完形の忍冬唐草軒平瓦を配す。この流水を受け



第3A図 東室および妻室北のトレンチ遺構図



る石溝がL字形にあり、板石敷の小池に導かれる。

iii 第235トレンチ 東室北妻の北側にのこる子院の石垣上に、石垣に平行して、設定したこのトレンチでは、地表面に明治まで続いた宝蔵院の築地基礎が残存している。これに伴なうと考えられる瓦敷 SA4530の他、築地基礎痕 SA4531、石列 SA4532、池 SG4533を検出した。

SA4530 平瓦と丸瓦を組み合わせ斜面に貼りつけた瓦葺である。子院の苑地の嵩上げに伴なう土留めの作業と考えられる。瓦はすべて近世のもの。

SA4531 現地表下30～40cmで検出され、現存する築地基礎に先行する幅約1.1mの築地基礎の抜き取り痕跡である。このレベル差に対応して、残存する宝蔵院石垣などの基礎は積みたされて嵩上げされている。

SA4532 トレンチ東端で検出した南北方向の石列である。東面に幅約10cmの溝を伴なう。位置的に知足院と宝蔵院の境界の土堀跡と考えられる。

SG4533 東室の北辺にはほぼ並行する地山を切る池である。東岸はSA4532に切られているが、北岸はトレンチ東半部の北拡張区で検出し、西岸はトレンチ西端に及ぶ大きな池である。瓦器・土師灯明皿・青磁片・染付碗等を出土している事から、宝蔵院が築造される直前に埋めたてられた池と考えられる。宝蔵院は江戸初期以降から文献に記載されており、創立も江戸初期ある



第38図 食堂北側の井戸SF4501  
(南から)230トレンチ



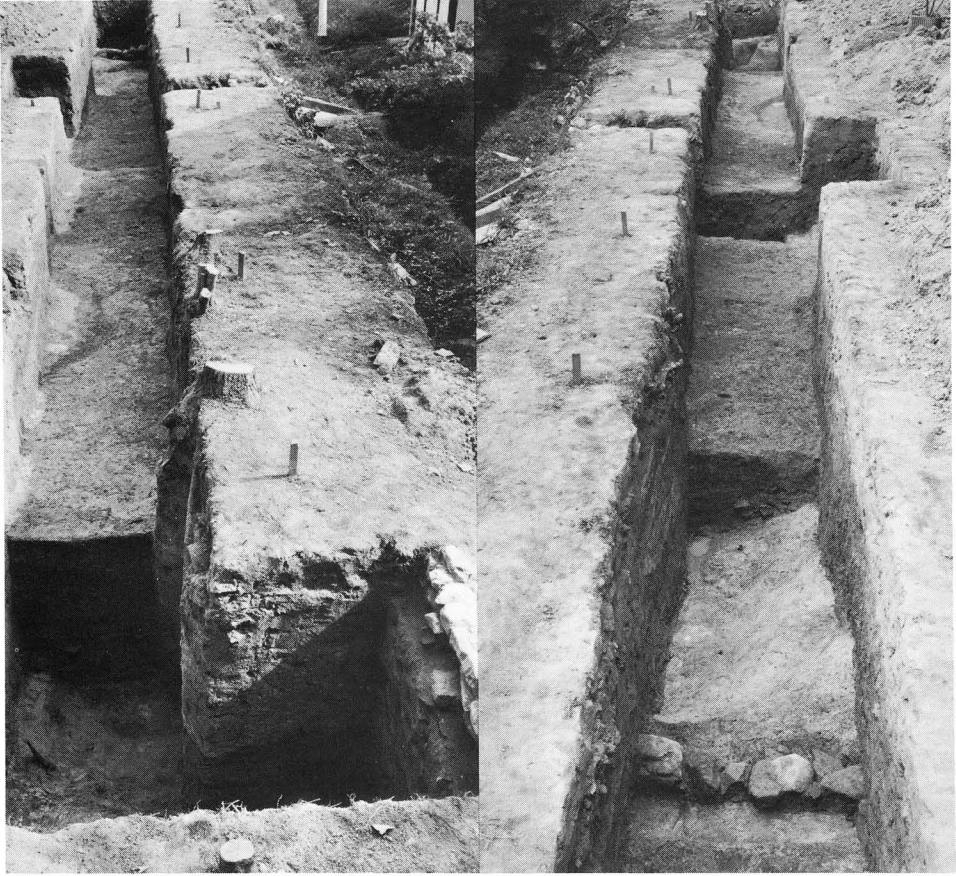
第4図 大宝蔵殿西側通路のトレンチ全景  
(南から)229トレンチ



第5図 県工作所南側  
トレンチ全景  
(西から) 234  
トレンチ



第6図 知足院と弥勒  
院の間の排水  
溝(東から)  
234トレンチ



第7図 東室北側トレンチ全景(左 西から, 右 東から)231トレンチ



第8図 東室北側の江戸時代の瓦列細部(南から)231トレンチ

いは、それをややさかのぼるものと  
考えられている。したがって  
SG4533上層の深さ1.5mの整地層も  
中世後期から近世の整地と言える。

#### B 大宝蔵殿表門から北収蔵庫西側 の地区

大宝蔵殿から不浄門旧地に至る道  
路である。参詣者用手洗より南の  
第223トレンチと、それより北約40cm  
の第229トレンチに接続する部分と  
からなる。トレンチ幅は70cm～1m  
で、総延長は75mである。この両ト  
レンチで土壙（SK4540）、溝  
（SD4541）および径0.5m以下の小  
土壙数個を検出した。

SK4540 第229トレンチ北端で上幅  
4mで東西にのびる地山の落ち込み  
を検出したが、その東西への拡がり  
は未確認。ただし、西に入れた第  
230トレンチには及んでいないので  
土壙の可能性が強いが、大きなV字  
形の断面形は溝をおもわせるもの  
でもある。

SD4541 第230トレンチで検出した  
上幅0.8m、深さ1.0mの素掘溝であ  
るが、のちに廃棄されている。この  
溝は、その位置から綱封蔵の南側に  
現に存在する石組み溝の先行溝と推  
定される。出土品と土層から室町時  
代以降の溝であり、子院に伴うもの  
と推定できる。



第9図 東室北側の江戸時代の瓦列  
(東から)235トレンチ



第10図 東室北側の江戸時代の瓦列細部  
(西から)235トレンチ

## C 大宝蔵殿内部の調査

大宝蔵殿の北倉・中倉・南倉と南北にならぶ三棟の宝蔵建物の東側空間地に配水工事がされるので事前の調査を行なった。国宝東大門の西北にある安養院表門の地下を暗渠でぬけて、南倉に至る配管と、聖徳会館敷地の北西隅から東大門の北側に、その地下5mのところを圧入工法によって設置された配管とが南倉の東南で合して北上し、北倉の東で、昭和56年度布設の本管に合される。この本管に地上式消火栓用の二本の支線がつく。全体にトレンチはY型となった。大宝蔵殿の敷地からは中倉、南倉建設にあたって古代の柱根が発見されており、北倉建設に伴う事前発掘においても柱穴の検出があったので、トレンチ幅を2mとして調査の完全を期した。この地の基本的土層は現地表下約80cmは大宝蔵建設に伴なって移動した土層で、所どころ、工事の仮設物設置のため深掘されていた。旧表土上に薄い灰褐色砂質土がのる。これは近世の堆積土である。その中に暗褐色の粘質土があり、中世の遺物を含む。この下には黄茶褐色土があり、古代となる。地山は、南倉と中倉の間より以北では黄色の、強い山土である。この山土層下部との間に砂層があり、黒褐色粘土となる。それ以南は、植物遺体を大量に含む黒色粘土層となる。植物遺体層の直上の暗灰粘土は、部分的に粘質も著るしかったり、弱かったりする。以下主要な遺構について、説明を加えよう。

### i 中・近世の遺構（東蔵院跡）

S F 4550 中倉の東側で検出した東西方向の道路遺構で、青灰色粘土層のうえに、径5cm以下の小砂利を敷いている。南側には築地土塀の基壇であるS A 3000があり、北側には縁留め石が並ぶ。前年の食堂・細殿南側地区で検出した道路S F 2117の東への延長部分であろう。安養院と東蔵院の間の道路である。築地基壇は旧安養院北側築地で、この天端から道路面で約80cmある。これは道路が中世以来の高さを留めているのに比して子院が嵩あげされた結果であろう。

S D 4551 道路S F 4550の北端留石から北に幅1mの断面U字形の素掘構がある。S F 4550の北側溝であるが、道路の北側の東蔵院の南端を画する溝でもある。S D 4551の北肩はガラガラとたちあがり、道路面により約80cmたかい。これによって東蔵院南面には石垣等の施設がなかったことが知られる。

S Z 4552 北倉の東南隅部ちかくに南北約2m東西2m以上の、一辺20cm程の川原石を並べた石囲風の遺構である。この埋土から土師器片・瓦器片・瓦質土器片が出土したので、室町期の遺構であるが、その性格は判らない。同様のものが旧安養院側にもある。推測をたくましくすると、窠築の基礎と考えてよいが積極的根拠がないので呈示するにとどめる。なお、中倉より以北は、もともと凹地であったのか、S Z 4552の直上まで現代の廃棄物がつまる。

S K 4553 道路北側溝の北側に柱掘形風の長方形の土壇がある。東西1.5m、南北1.1m。なおこの周辺に径10~20cm前後の小土坑があった。以上が子院東蔵院に関連する遺構である。

### ii 中・近世の遺構（旧安養院跡）





第11図 大宝蔵殿南倉南側。上部は安養院表門の基壇(北から)213トレンチ



第12図 大宝蔵殿南倉から東南へのトレンチの中世面(西北から)214トレンチ

S L4554 旧安養院築地の基壇である。北北側築地は径20cm前後の小転石や小割石を野面に積み、内側は50cm程の大形転石を一段のみ積み並べる。

S Z4555 南倉の東側で検出した石組み。南北1.5m、東西1.5m以上で、内側に石の面を積み並べたもので、層位等から室町時代のもので、S Z4552とよく似ており同様の施設であろう。

S D4556 東西に掘られた大溝である。地山を深く掘りぬく。上幅約6m、深さ約2mで、その上部埋土には近世の土器片を含むが、S A4557の築地基壇よりはなない。溝中から遺物品4箱分の平瓦片、土器片が出土した。

S G4558 トレンチ南端で二又に合かれるトレンチの南東支トレンチ部分で検出した。この池の最上部の埋土にはラムネビンが入っている。その下層の土層・出土品からみて、安養院の庭園の洲浜の一部かと推定される。汀線に作り出した凸出部をもつ。その他 この地区には、中、近世の素掘溝や小土壙が多いが、何分にも線的発掘であるので、この各々の性格を究明するには至っていない。又安養院表門の基壇、内側雨落ち溝なども検出している。安養院表門は現位置での、先行遺構はなかった。

### iii 古代の遺構

S X4560 現安養院表門の内(北)側のトレンチから大量の若草伽藍に關係する瓦片が出土した。この瓦群は土壙に入れたものではなく、灰褐色粘質土のうえに直接あった。安養院表門の内側よ現表土下約1.5mのところ、門中心より約8.5mのところ



第13図 大宝蔵殿東側トレンチ全景(上・南から、下・北から)217トレンチ

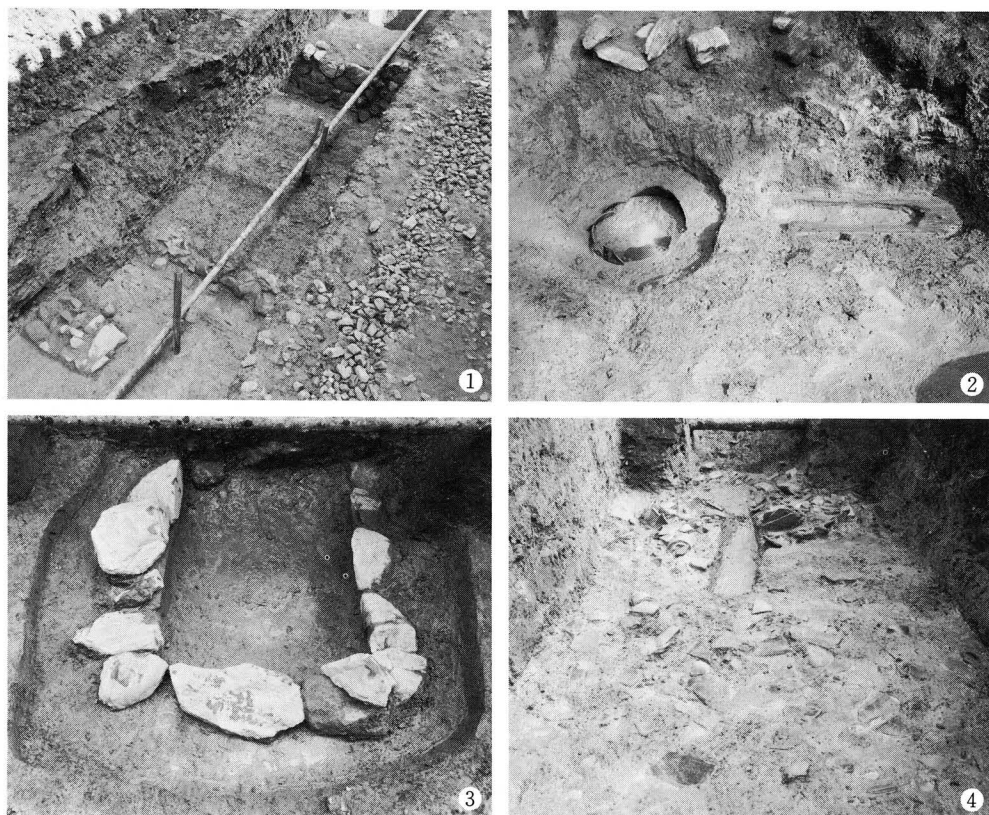
までの部分は、瓦片が2～3重に不規則に積み重なっている。瓦は平・丸瓦片があるが、混在していた。軒丸瓦も多く、10数体分を数えるが、瓦当面を上にしたものと、下にしたものもあり、かつ、平・丸瓦片にまじって出土した。この瓦層の北端部から陶硯片が出土し、瓦の下にある灰褐色粘質土上からは、須恵器・土師器片等が出土した。この瓦層の南へのひろがり、東・西へのひろがりは未確認であるが、相当の瓦があるものと推定できる。

S K 4559 近世の池 S G 4558の汀の部分に須恵器甕が土壌中から出土。直径0.8m、深さ0.5m。

その他若草伽藍関係の瓦の出土地点 トレンチの南端は二又部分より以南の灰褐色粘質土から、多くの平・丸瓦、およびパルメント文様の若草伽藍関係の丸瓦片を検出した。なおこの下層は、暗褐色ないし、黒褐色の粘質土となり、大量のアシ等の植物遺体を含む地山となる。

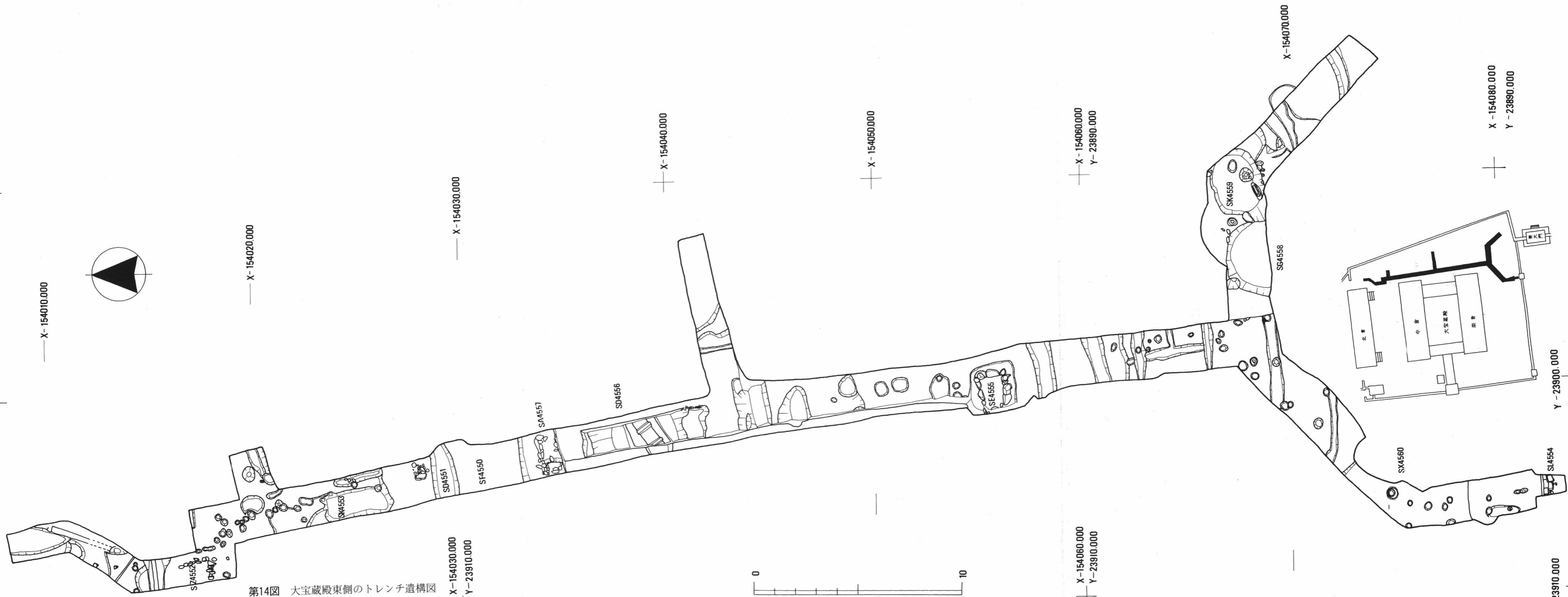
#### D 食堂周辺地区

食堂の南面を細殿に平行して、網封蔵の北で直角に北に曲るL字形のトレンチである。全体的に食堂の東方にある防火用の小規模な池のあたりで地山の高さは東方に急降下する。食堂の西側では本来、地山の高さは現地表下あまり深くないところに地山天があったようであ



第15図 大宝蔵殿東側トレンチの遺構細部①S F 455・S D 4551(北から)、②埋甕(北西から) 214トレンチ③石組S Z 4555(東から)④安養院門内側の瓦群(北から)





第14図 大宝蔵殿東側のトレンチ遺構図

X-154030.000  
Y-23910.000

X-154010.000

X-154020.000

X-154030.000

X-154040.000

X-154050.000

X-154060.000  
Y-23890.000

X-154070.000

X-154080.000  
Y-23890.000

X-154060.000  
Y-23910.000

Y-23910.000

Y-23900.000

SL4554

SX4560

SG4558

SK4559

SE4555

SD4556

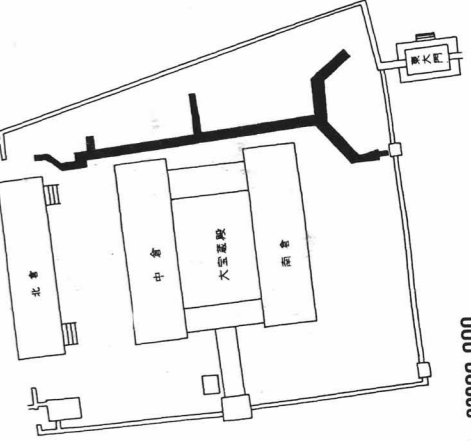
SA4557

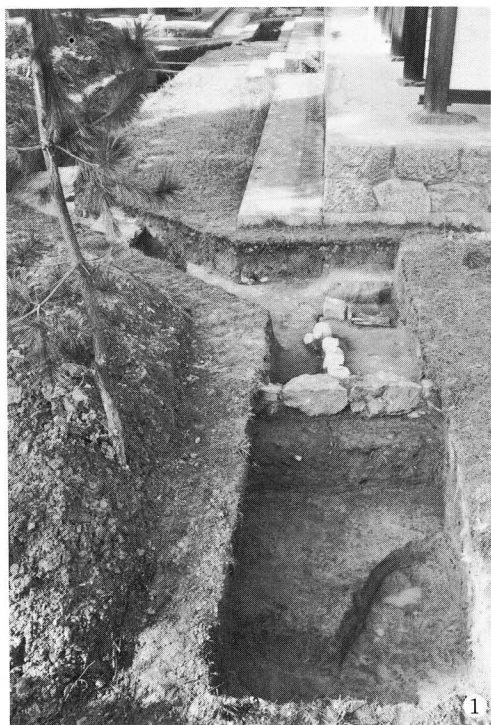
SF4550

SD4551

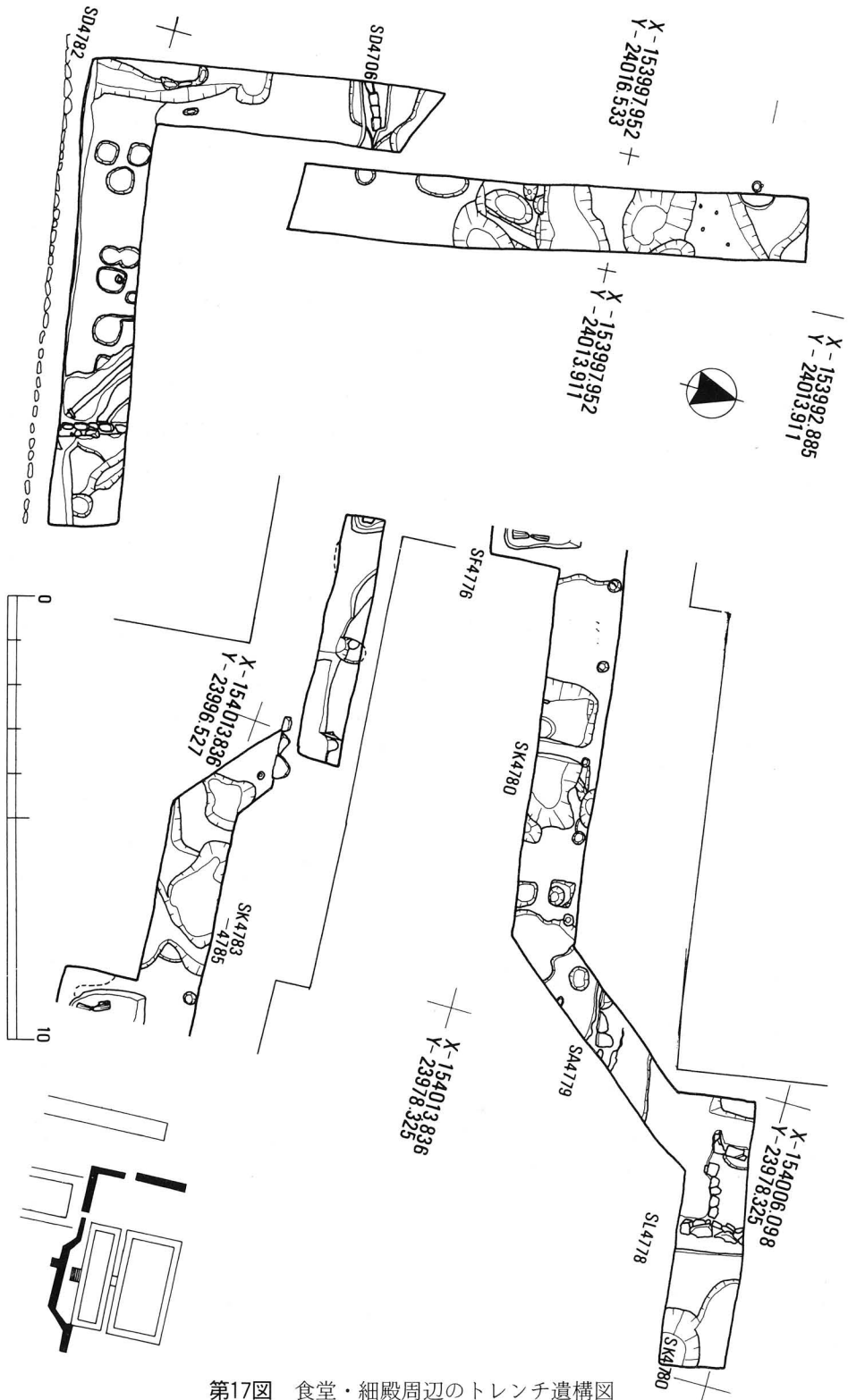
SK4553

SZ4552





第16図 食堂、細殿周辺の調査①細殿東および南側(東から)240トレンチ②細殿正面(東から)  
③網封蔵北側(東から)238トレンチ④食堂西側(南から)237トレンチ



第17図 食堂・細殿周辺のトレンチ遺構図

るが、土取りによって出来た土壌等によって深くなっていた。食堂・細殿南側の平地では、食堂・細殿に向う南からの道路遺構の存在を予想して調査を進めたが、調査地のほぼ全面にわたって近・現代の遺構が地山面まで及んでいたので古代のものは検出できなかった。

S F 4776 食堂の中心線の南延長上にある近代の道路遺構・現地表下20cmで幅約2 mにわたって、小砂利と小碎石片があった。

S L 4778 細殿の現コンクリート基壇の東3 mで南北に検出した20~30cmの自然石を縁留めとした土積基壇のあと。この基壇の南辺は、南北の石列からT字型にのびる。これは現細殿基壇南辺に一致する。これとは別に現基壇より南1.5mで、自然石の石列を検出した。これは昭和大修理以前の細殿の土積基壇の南辺石積である。

S A 4779 細殿現基壇と平行して、南2.3mのところにある東西方向の柵列。柱間隔は2.2~3 mと不揃いで、柱掘り方は径20~30cmの円形。細殿を囲む柵列。柱穴の埋め戻し土から瓦器片が出土している。室町時代。

S K 4780 S A 4779の南側で検出し、東西2.8mの楕円形の土壌、土師質灯明皿等が出土。

S K 4781 細殿の東方、トレンチ最東部で検出した不整形の土壌。底部ちかくから鎌倉の瓦片等が出土。

S D 4782 トレンチ西部の、東室土塀に平行してある溝で、平均上幅60cm。その一部を発掘した。この溝の深さは30cm程であるが現在も湧水量が多い。瓦器出土。

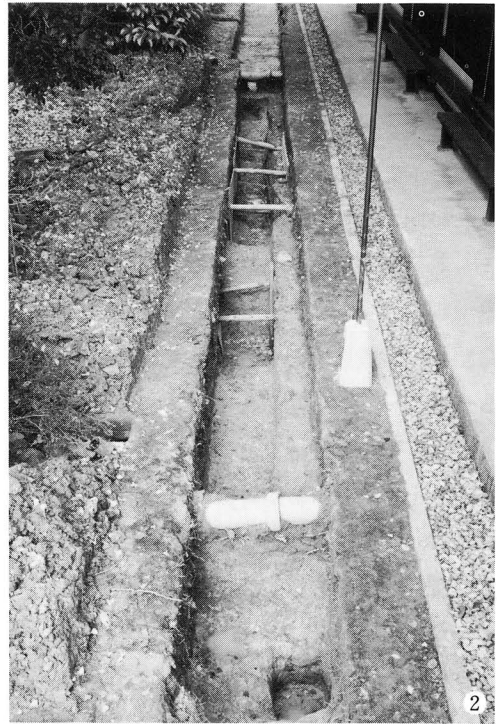
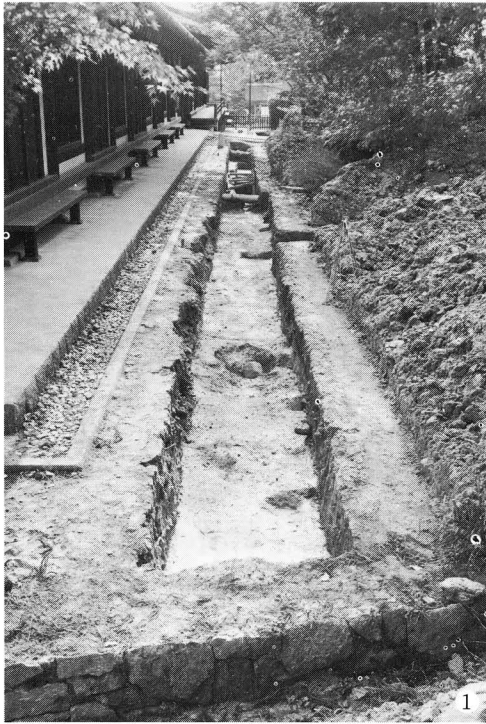
S K 4783-4785 細殿基壇と、綱封蔵基壇東北隅部が接する部分にある土壌群。うちS K 4783は東西が3.5mともっとも大きい。表土から鎌倉・室町期の瓦片出土。

S K 4787-4790 食堂西妻に併行するトレンチで検出した。うちS K 4787は上幅1.4m、深さ40mの溝状の土壌。S K 4788は上幅1.4m、下幅80cmの長楕円形の土壌。これらの土壌は現地表下1.5m程の深さがあり、その形が不整形で、土壌そのものに伴う出土品もなく、土取りによって出来た穴と推定しうる。穴の埋め土には大量の瓦・土器片を含む。

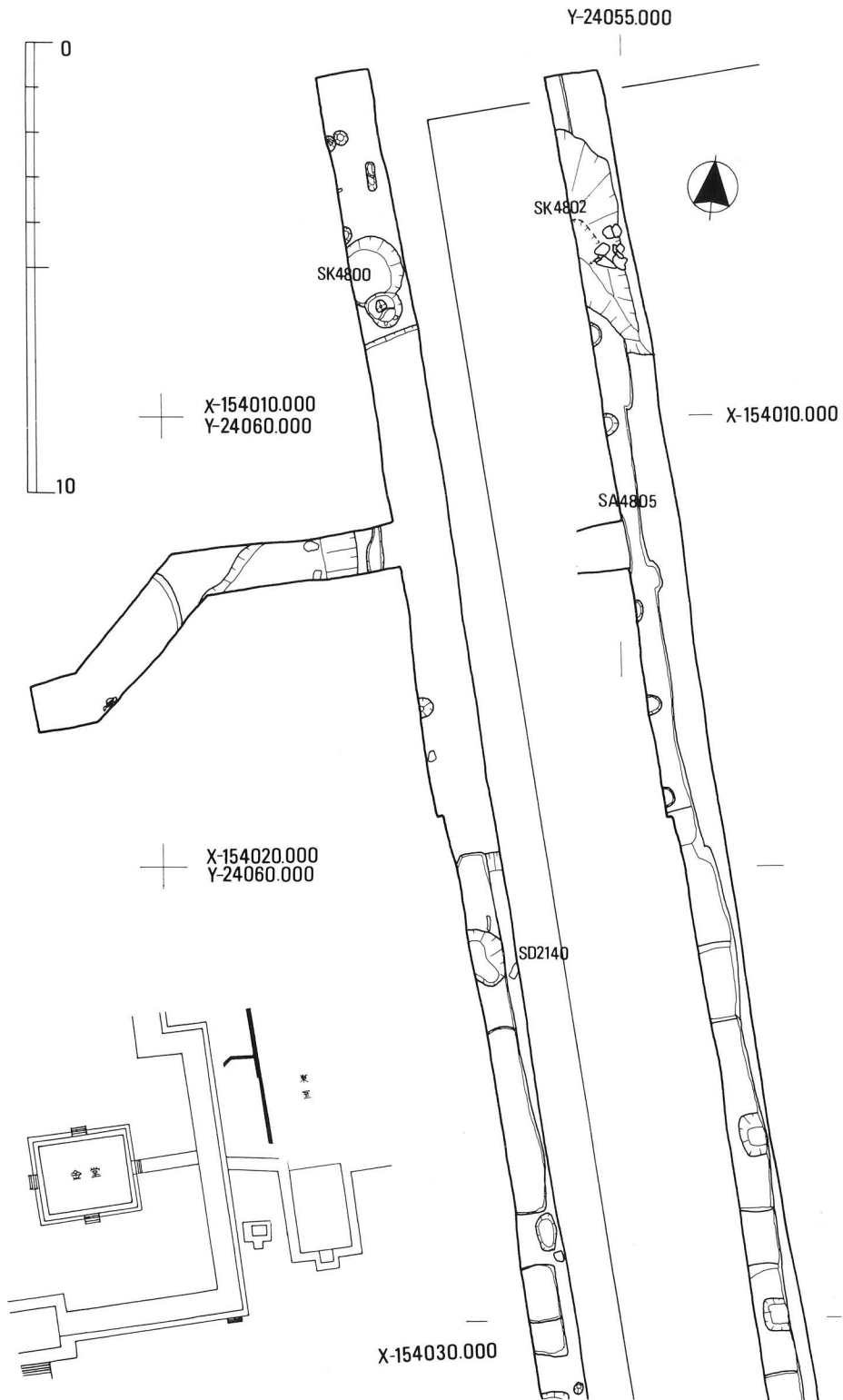
S D 4786 南北トレンチの中央部で検出した瓦質土管である。4本が西から東へ連なり、合計1.1mの長さを発掘したが、東端は近代の土壌で切られている。落差は2.6cm、掘り方が検出されないの、地上にすえたものであろう。

## E 東室・聖霊院西側地区

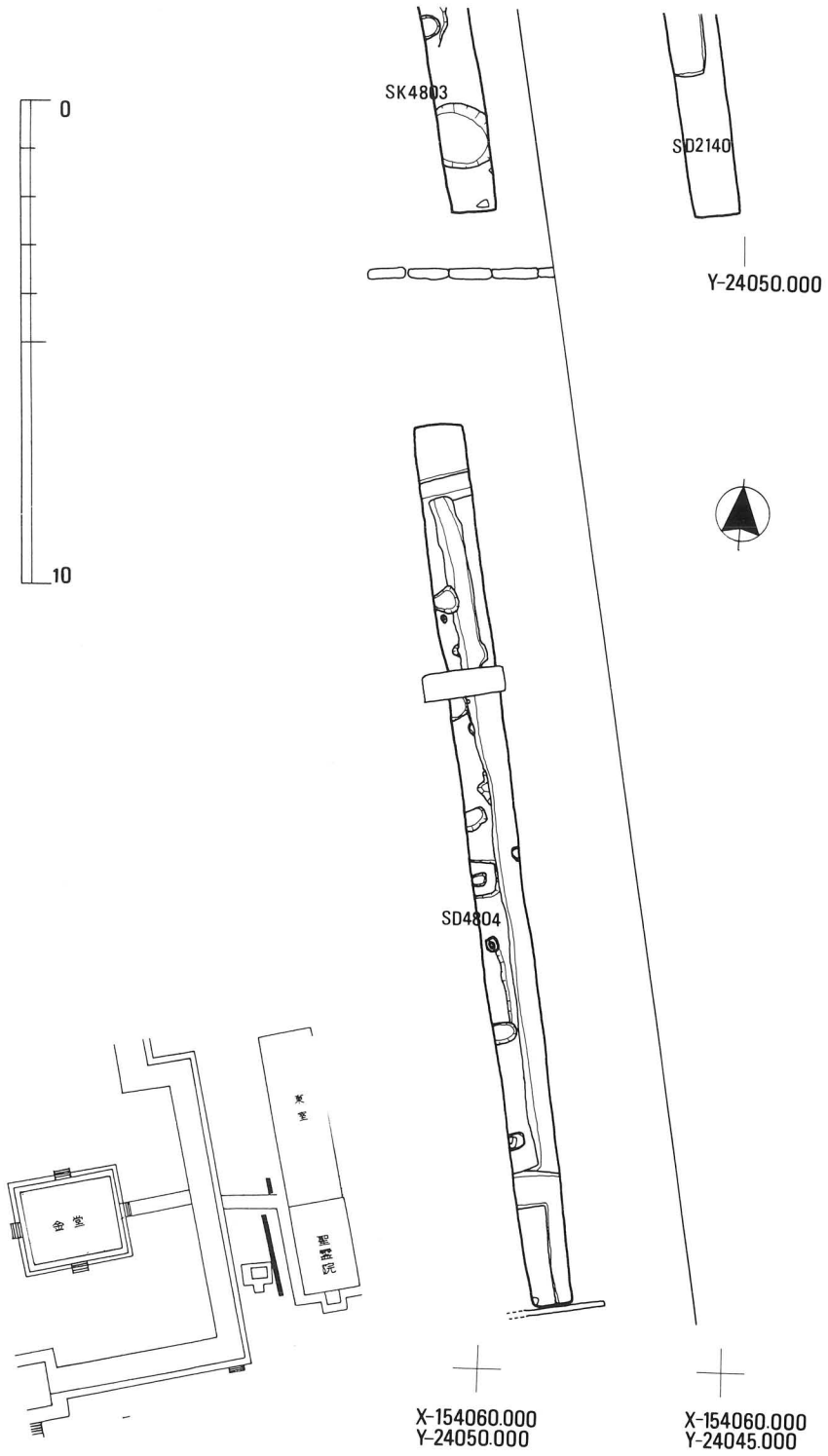
東室と東回廊との間はわずかに約14mの間隔しかない。そこには一切経蔵があり、さらに公孫樹などのを植栽し、防火林としているので、発掘可能な幅は限られている。このため、トレンチは0.7m~1mの幅となった。聖霊院と東室との中間の馬道より以北は後述する自然川道筋S D 2140（昨年調査では大溝としていたものの上流である）の埋土を掘ったこともあり、発掘中にトレンチ壁の崩壊を防ぐため、保強材で保強して調査を進めた関係で、トレンチの下幅はわずかに0.4mとなった。この地域の基本的な地層は北から南へ、西から東へ地山が傾斜しているのがのちにのべるS D 2140（旧河道）の埋土のうえに西院関係の遺構があるので、東室の北から3本目の柱から、馬道あたりまでは、整地土があった。トレンチの位置



第18図 東室と聖霊院周辺の調査①東室西側(北から)236トレンチ②同上(南から)③聖霊院西側(北から)242トレンチ④聖霊院南側(東から)243トレンチ



第19図 東室西側のトレンチ遺構図



第20図 聖霊院西側のトレンチ遺構図



が東室の柱心から西へ3.5mの位置にあたったので昭和修理に伴う足場穴S A 4805がトレンチの西壁添にあった。

S K 4850 トレンチ北端部で検出した南北1m,東西0.5mの浅い土壌で,なかに小石があり,その一部に焼け痕がみられた。

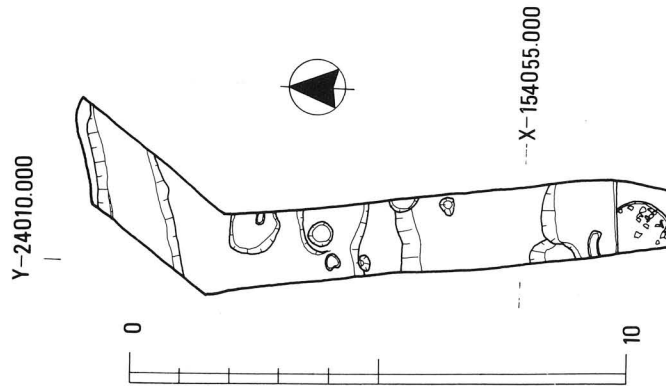
S X 4851 瓦溜り。さきのS K 4850北側に中・近世の瓦を中心とした瓦堆積があった。その南北の長さ2.3m,東西は,東室の下に入ってゆくので不明。

S K 4802, S K 4800, S X 4801の下層にある南北上幅約6m,深さ約3mの傾斜のきつい土壌で,その底部近くに,30~50cm大の角がある転石が投げ込まれていた。石材のごく上部に平・丸瓦片があった。瓦片は奈良時代のものであるが,土壌の切り込みからみて,中世の遺構である。

S K 4803 東室の馬道の東北で検出した江戸時代の瓦製火舎等を含む土壌。上幅は1.5mの円形で,深さは0.7m。

S B 4804 聖霊院西側にある閼伽井の南約5mに雨落ち溝があり,その内側に小形の自然石を縁石として配す。北辺は,現代の井戸の渡り石のま北に雨落ち溝がある。雨落ち溝間の距離1.5mで,井戸に至る渡り廊下風の建物と推定できる。なお南雨落ち溝のさらに南5mにも東西方向の小溝があり,北側は平瓦片を立てて並べ縁止めとする。

S D 2140 トレンチ中央部を東西によこぎる。この部分は現表土下約40cmで整地土上面とな



第21図 調子丸廬舎南側のトレンチ遺構図



る。よく締まった黄褐色土で、遺物を含まないの地山と見まちが易い土である。これは厚さ約40cmで、その下に厚さ1cm程の木炭層があり、それより下は青灰色の砂質土層となる。そこにもごく少量の瓦片がある。S D2140の中央部での深さ約1.5m。昭和55年度の第22トレンチで報告されている急激な地山の降下はこの旧河道の右岸にあっていたのである。また東室・聖霊院の解体修理中に、おのおの地山の異常な深さが記録されているが、これもまたこの旧河道にあっていたのであることを付記しておく。

#### F 調子丸廐舎南側

旧年の第128トレンチから網封蔵方向へ、くの字型のトレンチを設定した。

S K4816 トレンチ南端で確認した土師器を大量に含む土壌で、昨年度調査で、その南側半分が発掘している。

S D4817 トレンチの北端部で検出した素掘溝で、地山（火山灰がその最上部に厚く堆積する）を掘り込んだ上幅約1.4m、下幅約1.1mの皿形断面の溝で、西から東に流れる。位置的にはS D2118に関係するものと思われるが石積みがないので一応、別の溝としておく。

S D4818 S D4817の後身溝で、少し方向が南に振る。南側には3～40cmぐらいの自然石による縁留めがある。



第22図 調子丸廐舎前の南北トレンチ(南から)228トレンチ・

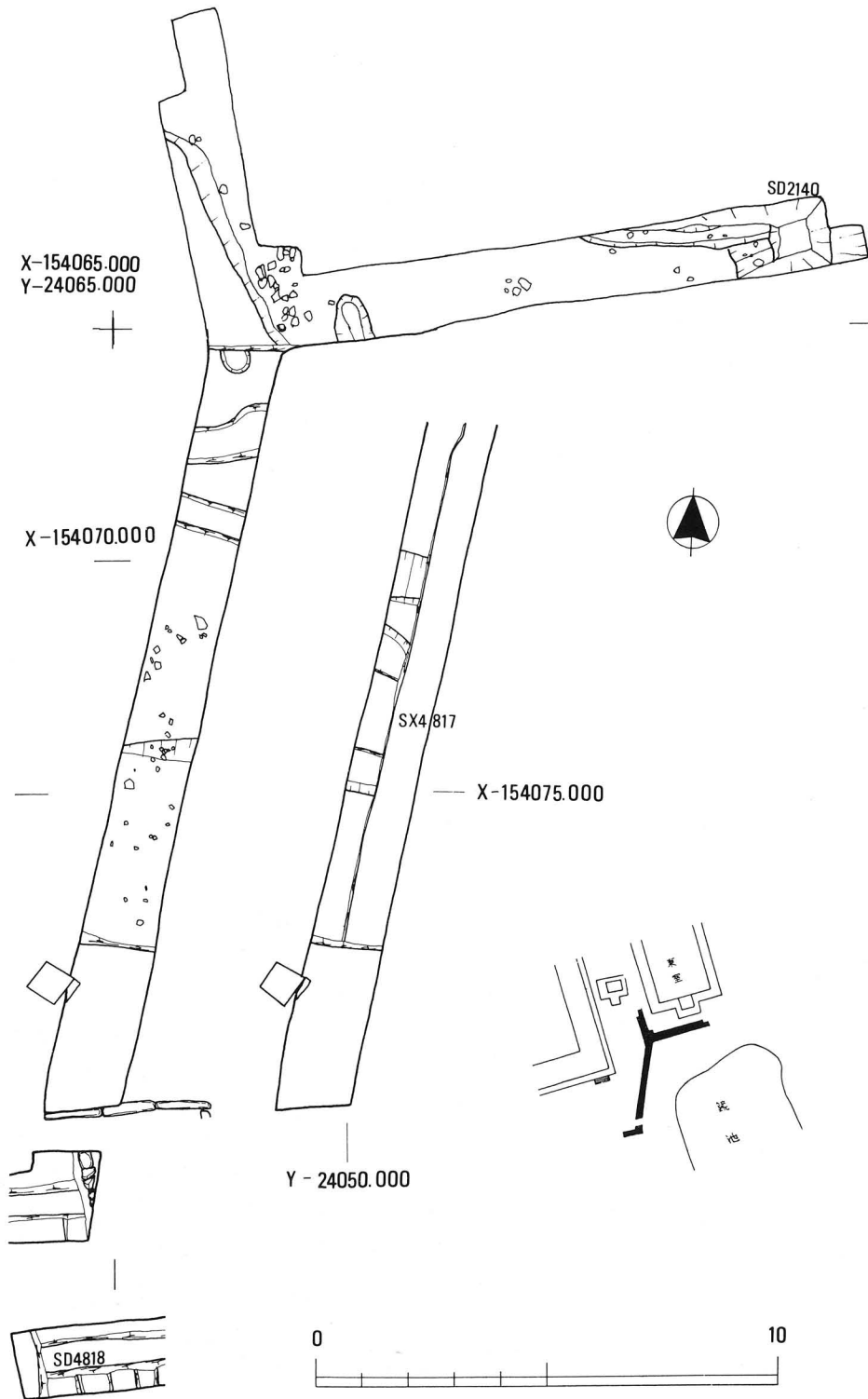
## G 聖霊院地区

東室と聖霊院の西側を南北に走るトレンチは聖霊院の西南方で、昨年(2017年)の第129～127トレンチと直角に交わり、ここから手水舎西にのび、さらにここではほぼ直角に西に折れ曲り中門前地区にのびてゆく。この地区は地形的に複雑である。確認した遺構の数は少ないが、整地の仕方から知りえたことは大きい。

S D 2140 昨年度に第128トレンチで確認した旧河道の西肩を検出した。ちょうど聖霊院正面向拝中間ぐらいで、地山は約1.3mも急に落ち込む。これに西から流れ込む小溝もありこの中には炭が含まれる。この溝の埋土は昨年の概報において概略を報告したように、西方より山土を落し込んで埋めている。この埋土はあまり踏み締め等がされず、粗である。西肩から約10m西の南北トレンチと東西トレンチの交差点ちかくの地山上に、榛原石片とともに凸面に洗濯板状整形をもつ瓦片が集中しており、瓦のうちのいく片かは火中痕跡があり、またこの瓦片中には少量であるが、炭片もあった。なお、遺物としては西肩上に洗濯板状整形瓦



第23図 聖霊院西南の瓦の出土状態(南から)242トレンチ



第24図 聖霊院西・南のトレンチ遺構図

とともに須恵器があった。これらの遺物を覆って埋土がある。

S K 4816 南北と東西トレンチの交合点の南側で直径約80cmの土壙を検出した。この壙の深さ7cm程の浅い皿形の掘り込み内部の土はすべて高温の火を受けている。この火を受けた土中に土師器片と、ごく少量の銅片が含まれているので、銅加工に伴う遺構である。土層から西院伽藍造営時のものとするができるが、石膏によって固めて取りあげ、いまだ土師器片は取り出していない。

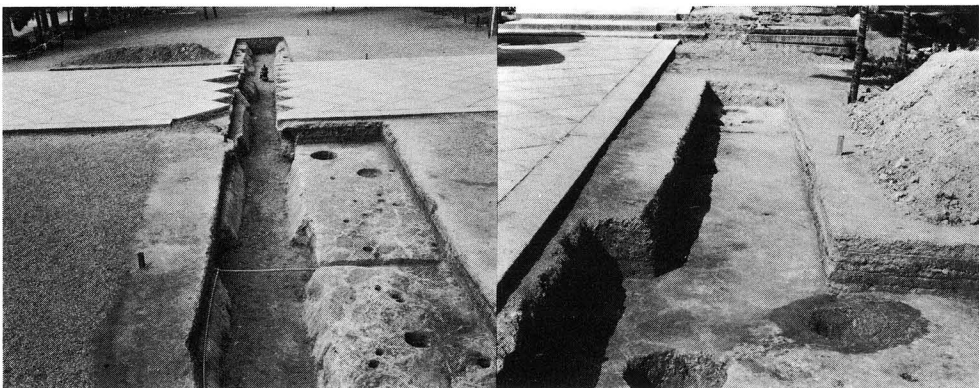
S X 4817 自然の地形の落ち込み。東南方向に開く谷頭の部分である。この谷の埋土のなかに若草期の瓦片が多く、他に新しい遺物が含まないので、この部分は若草期の造成であるかもしれないが確証はない。

S D 4818 手水舎南で東西に入れたトレンチで、自然河道（谷）の埋め立て跡を見出した。この旧河道の西岸は弥勒院から西院回廊に至る参道の西側にあるので、昭和55年に検出した柵列はこの整地土中にあったことが判明した。埋め土に遺物を含まないので、その整地時期は確定しがたいが、整地土の状態からは西院伽藍に伴う整地である可能性が強い。

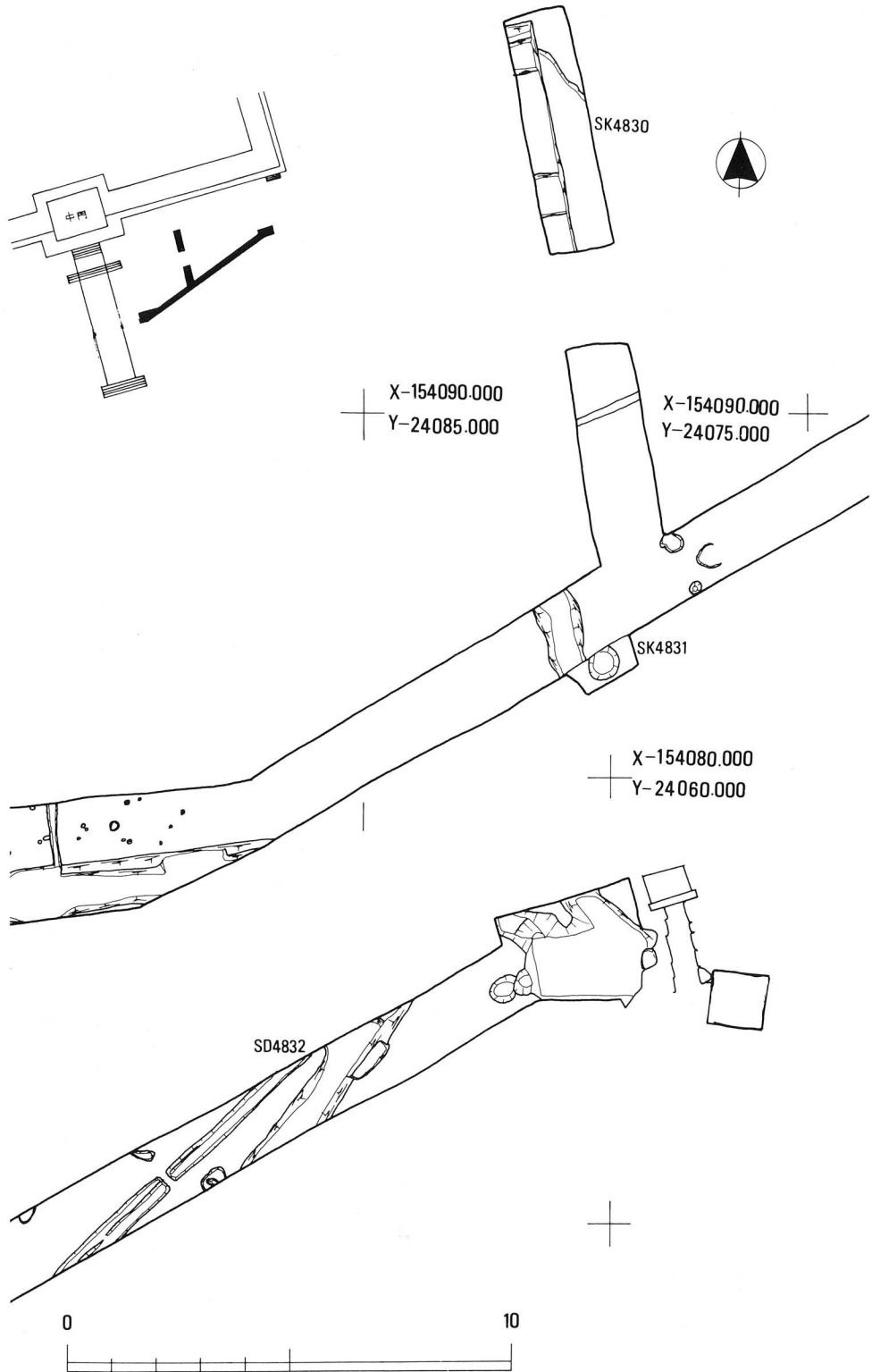
その他の遺構。聖霊院西の井戸から手水舎に延びる竹樋水道と、銅管水道を検出した。後者は大正期の布設である。竹樋水道には木製継手を用いている。聖霊院向拝の前に現在使用中の聖霊会竜竿仮設用の瓦製蓋をもつ掘り方があり、この周囲に前後する3時期の掘り方がある。円形と方形がある。発掘したうちもっとも古いものは現在使用中のものによって切られている。掘り込み天は瓦器層である。手水舎南西で戦後まで存続していた法隆寺の茶店の基礎を確認した。

#### H 西院伽藍中門南側地区の調査

西院南面回廊東出入口前から、斜めに中門前石敷参道に向う配管と、中門から東へ東回廊5間目を暗渠で通って、金堂にゆく配管とがある。これに添って発掘調査をし、併せて中門前に推定されている西院南門の所在を明らかにし、遺構保存の万全を期すため、中門から



第25図 中門前の発掘、左・(東から)、右・(南から)

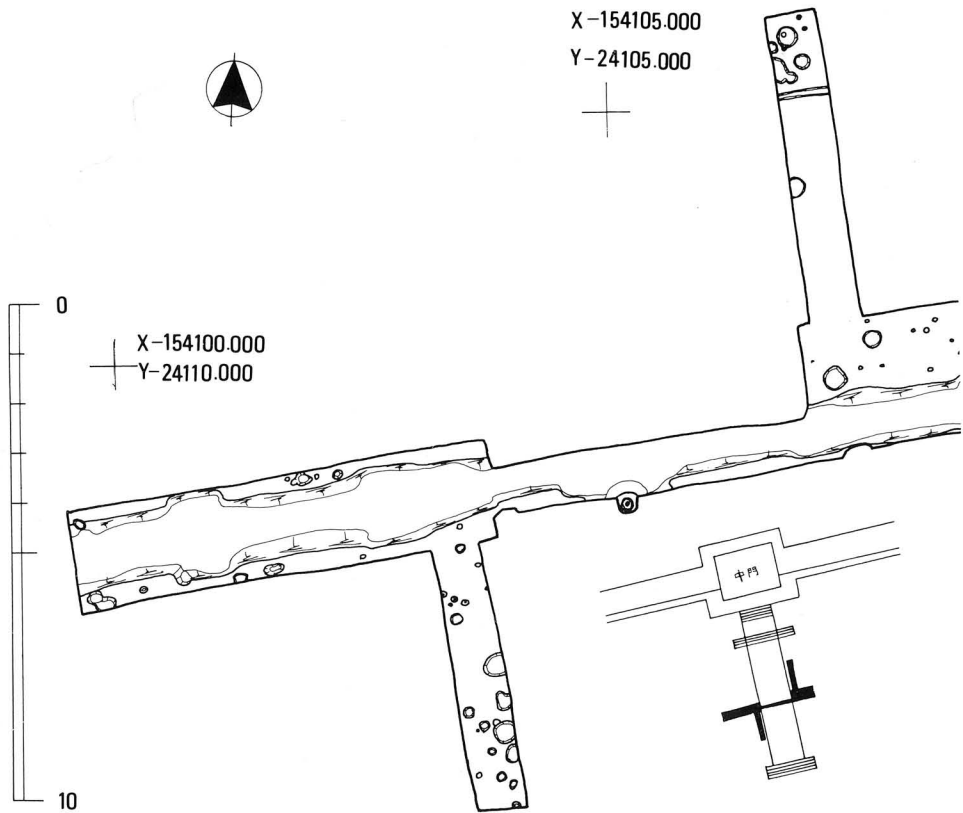


第26図 中門東のトレンチ遺構図

能石に至る石敷参道の延長に沿って、2本のトレンチを設定した。以下に主要な遺構の説明を加えよう。南門の所在地については、まとめの項にゆずる。

S K 4830 南回廊の東5間目の地覆から南に約5 mのところにある近世の土壌で、大量の瓦を含む。丸瓦と平瓦がある。他に磚が多い。土壌の南北は約2 m。深さは約1.5 mで地山を掘り込んでいる。江戸期の回廊修理に伴う廃棄瓦を入れたもの。

S K 4831 銅鏝を含む東西0.5 m, 南北0.6 m, 深さ0.3 m, 断面円形の小土壌で内部には銅鏝による黒色土と、少量の拳大の川原石, 銅鏝がある。なお、この周辺の江戸期の参道面からも、銅鏝および銅鏝の付着した川原石が出土している。S K 3101の周辺には、厚さ0.2 cm



第27図 中門南側の遺構図

前後の銅板の小切れ端しがあり、ここで銅の加工もされたことを示している。

S D4832 トレンチの東端で検出した幅約20cm、深さ15cmの素掘溝で、その方位は国土座標軸に80度西偏する。溝内から近世の磁器片と銅鏝をえた。

参道面の調査 中門前の敷石参道周辺は、現参道面（歩行面）の約10cm下に砂利、粗砂からなる参道面がある。これは昭和16年の聖徳太子1300遠忌回による整地面である。この面から10cm下、つまり現参道から約35cm下の地山直上に小砂利が敷かれた参道面があり、小瓦片、染付片が割合多く、他に古代にはじまる各時期の土器小片を含む。この直下は地山である。南門検出のための支トレンチを、東西幅6.3mの敷石参道の左右に幅1mで設けた。南に向かって5.5m（第252トレンチ）。北に向かって6.3m（第253トレンチ）を調査したが、検出したのは近・現代の小土壙のみであった。地層の関係はすべて参道面の調査と同じ。

### Ⅰ 大宝蔵殿西側広場

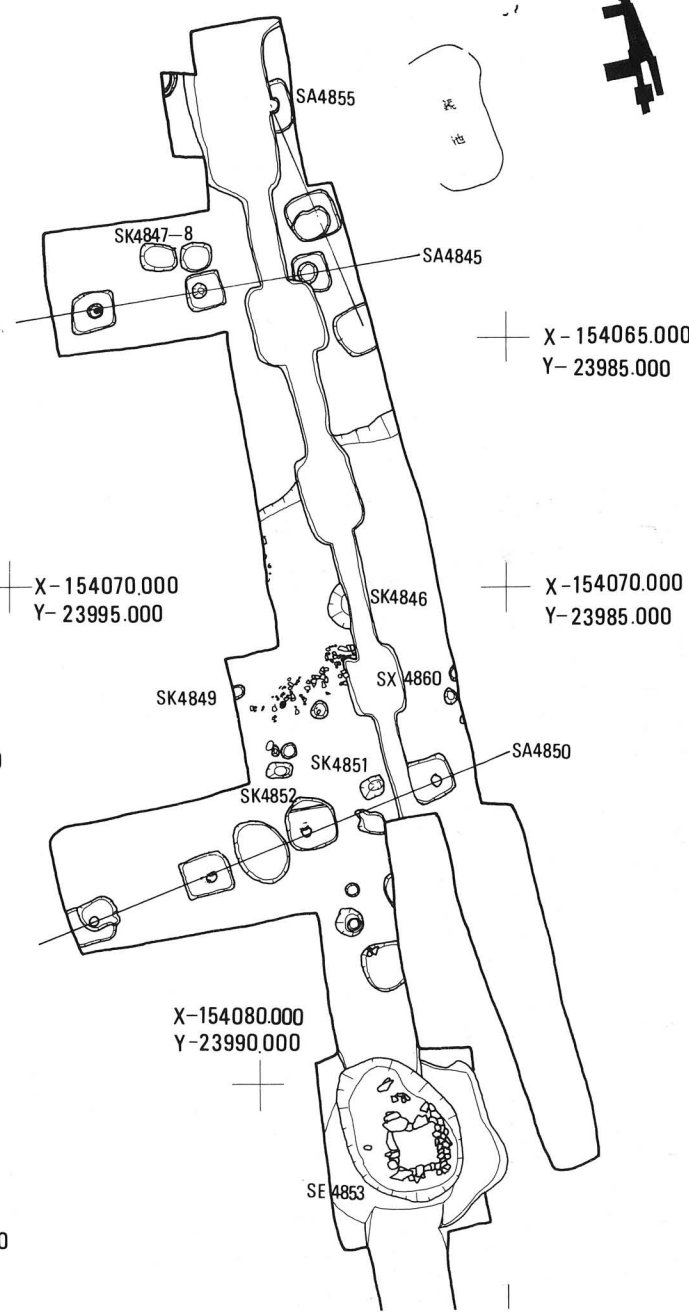
現在の実相院表門付近から、北上し、旧宝光院（寛政9年には金剛院、のち実相院）跡の庭園遺構の東側でくの字形に折れ曲って、北上し、昨年度調査の第127トレンチに至るパイプ工事に伴う調査である。この地区の調査は法隆寺参詣の善男善女の集合場所等になってい



第28図 大宝蔵殿前地区の調査と全景。(北から)225トレンチ



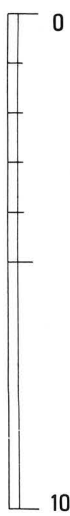
X - 154055.000  
Y - 23990.000



X - 154065.000  
Y - 23985.000

X - 154070.000  
Y - 23995.000

X - 154070.000  
Y - 23985.000



X - 154080.000  
Y - 23990.000

X - 154080.000  
Y - 23980.000

第29図 大宝蔵殿西側広場のトレンチ遺構図





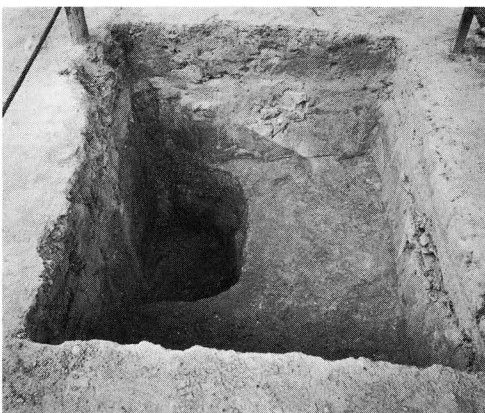
第30図 若草伽藍北柵列 (柵列北側の瓦群はすでに取りあげている(東から)。225トレンチ



第31図 若草伽藍北柵列北側の瓦溜(西から)



第32図 若草伽藍北柵列の複元(東から)225トレンチ



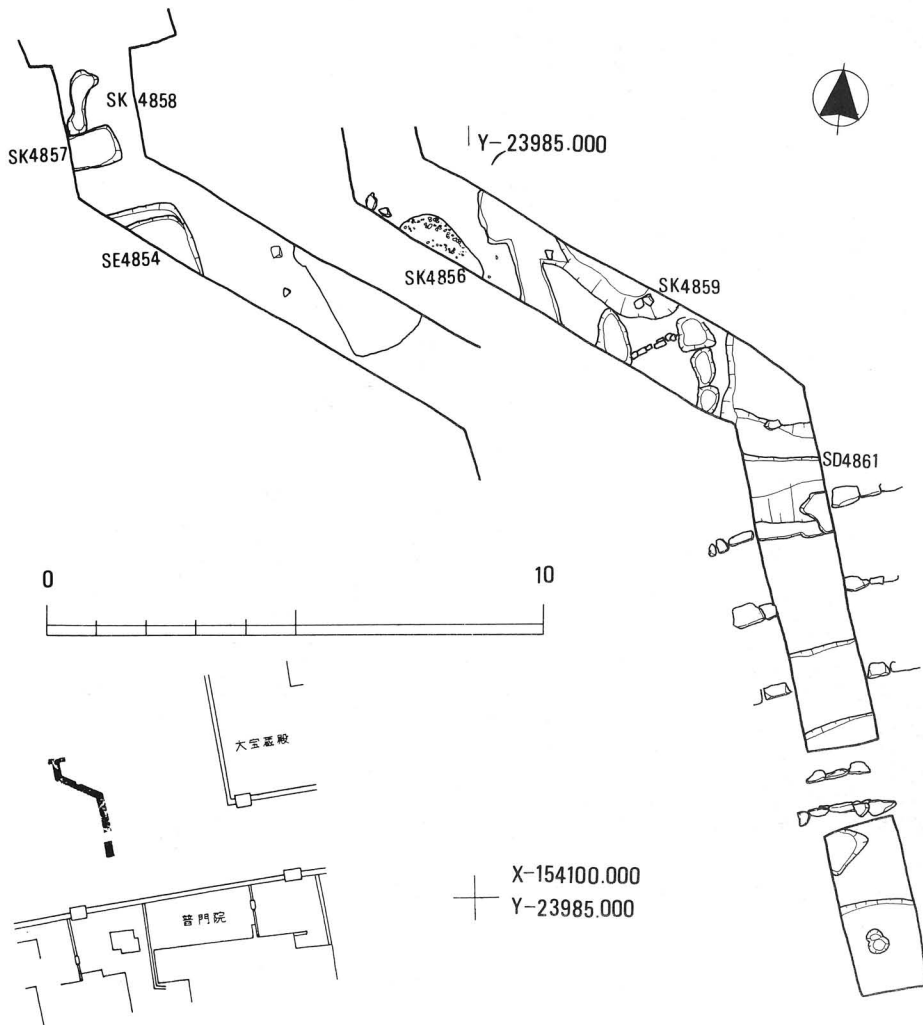
第33図 大宝蔵殿表門南側の  
若草伽藍北柵列  
の掘り方(南から)  
231トレンチ



第34図 鏡池東岸の若草伽  
藍北柵列の掘り方  
(東から)233トレ  
ンチ

る関係もあり、参詣客の少ない夏期のお盆あけに実施し、秋の参詣時期までに終了することにした。なお、この地点の表土は異常に固いので、電動スコップを用いると共に、トレンチの拡張時に、パワーショベルカーによって排土を移動すると共に、拡張トレンチの表土の一部を機械力によって除去した。当初はくの字トレンチであったが、トレンチ中央部において柱穴を検出したことに伴い、発掘調査小委員会の指示および文化庁の同意を得て、柱穴の性格をたしかめるため、三個所でトレンチを拡張した。その結果、若草伽藍に關係する柵列であることが明らかになったので、鏡池の東、大宝蔵殿表門南側の二個所で、小試掘（第231、233トレンチ）を実施した。ここで検出した遺構は溝2、土壇6、井戸2、柵列3、瓦溜り1である。

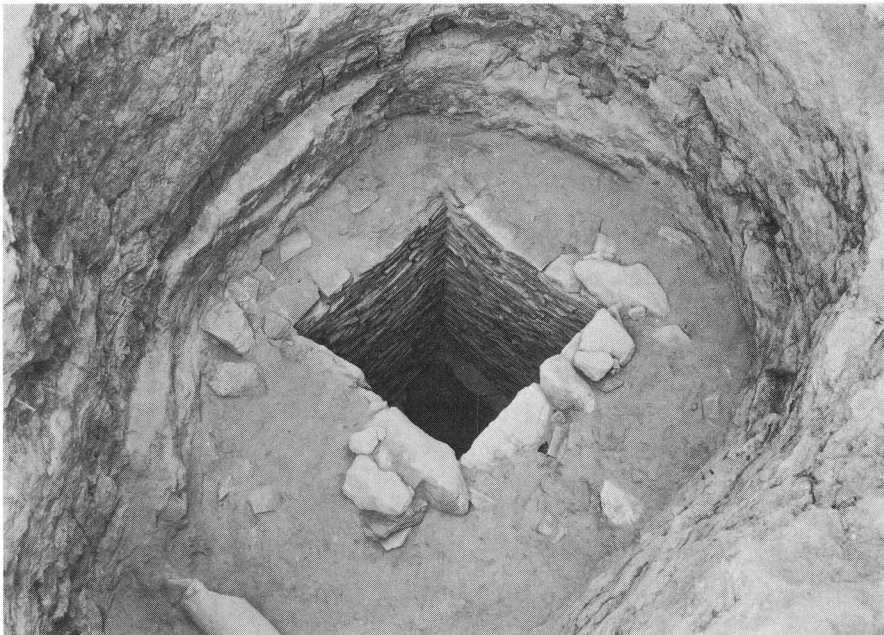
中近世の遺構には溝2、土壇6、井戸2がある。



第35図 大宝蔵殿西側広場南半のトレンチ遺構図



第36図 西院伽藍に伴う柵列 S A 4850(東から)225トレンチ



第37図 大宝蔵殿西側広場の井戸 S E 4853(西北より)225トレンチ

S K 4848・S K 4847 とともに短径55cm, 深さ10cmの長楕円形の土壇。遺物はないが, 埋土の種類からみて室町時代のもの。

S K 4846 瓦溜の北にある径90cm, 深さ5cm程の浅いすり鉢形の土壇。東半分は旧管掘り方のため, 破壊されている。出土遺物はない。

S K 4849 瓦溜りの北にある径50cmの円形の土壇。埋土から須恵器・土師器・瓦の各破片が出土する。

S K 6019 瓦溜りの南にある長径38cm, 短径30cm, 深さ3cmの土壇。埋土から須恵器, 瓦片が出土する。瓦片は洗濯板状整形瓦。

S K 4581 若草伽藍柵列の東より2本目と3本目の中間にある浅い円形の土壇, 深さ6cm。位置からみて柵列に関係するものと推定できるが性格は不明。長径1.2m。短径1.05m。

S K 4582 柵列と井戸の中間にある深さ9cmの浅い土壇。土壇底から洗濯板状整形痕をもつ瓦片が出土。

S E 4858 双円状の掘り方の中に一部石積, 一部瓦積みの井戸枠をもつ井戸。掘り方の長径3.1m, 短径1.2m, 深さ1.6mの一段目の掘り方底に, さらに径約1.3m, 深さ1.6mの二段目の掘り方を穿ち, その底に径70cm, 深さ50cm以上の素掘り部分を掘る。三段の掘り方を併せると, その深さは3.7m以上になる。素掘り部分は崩壊の危険があったので, 底までは掘り終ってはいない。井筒部分の東壁は瓦が大部分でそれに少数の自然石が混じる。西・南・北の三壁はすべて自然石を積みあげる。一辺80cmのほぼ正方形の井戸枠で, 最下段のみ内側にせり出し, 素掘り部分の天端にせり出す。東壁には9個の忍冬文にはじまる奈良時代・平安時代初期の平瓦が混じっているが, 大部分は平瓦を平積と小口積みとにしている。掘り方底部から瓦器片が出土し, 鎌倉時代の井戸である。なお一段目掘り方の底に凝灰岩片があった。

S K 4857 長辺90cm, 短辺75cm, 深さ40cmの方形土壇, 底部から瓦器出土。

S K 4858 S K 4857に切られている深さ15cmの不整形の土壇底部から瓦器片が出土。

S E 4854・S K 4856 一辺1.6m以上の方形掘り方の井戸であるが, 大部分がトレンチ外にあるので, 未完掘。S E 4854が廃絶したのち, その窪みを利用して土師器皿類を大量に投棄したのがS K 4856である。

S K 4859 長辺2.2cm, 短辺1.3cmで, 深さ1.3mの方形土壇で, 壇壁はほぼ垂直にたつ。その底に, 径約60cm, 深さ21cmの円形土壇がある。

S D 4861 浅い溝で, 2時期ある。当初は2mの幅であったが, のち1.3mに狭められる。溝内からは輸入青磁片等が出土する。位置からみて法隆寺西院南面大垣の内溝にあたるが, 溝の方向が西北西から東南東な方向に向うので, 子院関係の溝としておきたい。なお, この溝の南方の表土層で二彩小片が出土している。

S A 4850 ほぼ東西にのびる柵列で, その方眼軸に対する振れは17度9分43秒である。検出

した掘立柱の掘り方は4個で、その掘り込み天は地山直上の厚さ約2cm程の硬い暗茶褐色砂質土で柵列の北側にある瓦溜S X 6022はこの砂質土に密接している。柵列の柱掘り方は一辺85cmとほぼ方形で、深さ70~80。で柱を立ててのち灰褐色砂質土で埋め戻す。確認した4個の柱穴のうち、西端の一本を除いて抜き取り痕跡はなかった。掘り方の底には径20~25cmの柱底の痕跡が残っていたので、柱の直径を知りうる。柱間は東から2.7m, 2.1m, 2.6mで、中央の間が狭いが、第IV章でのべるように、今回の発掘地点が若草伽藍の中軸線上にのっていることとも関係するようである。地覆等の柱間装置の痕跡はなかった。第231・233トレンチで、東西への延長を確認した。

S X 4860 柵列 S A 4850の北側約2.8mのところでは瓦片が幅約60cmの帯状にあった。瓦片はすべて洗濯板状整形痕をもつ瓦片で、それにまじって素弁8葉の完形軒丸瓦が出土し、須恵器環のほぼ完形品も混じっていた。瓦は第31図でも判るように旧管掘り方より東方にはなかった。瓦の散布する帯状のひろがり、S A 4850の方向が同じで、地層的にも同一であるので、柵列と瓦群は年代的にも構造的にも関係あるものとしてよい。

S A 4855 S A 4850に直交する方向の柱列。掘立柱掘方を三個検出した。掘り方は一辺約90cmの方形で、深さ約70cm。発掘地の関係で、柵・建物いずれかを定めることは困難である。但し、南へも北へも柱列は延びないので、東西棟の妻部分の柱穴である可能性が強い。将来の調査をまちたい。なお、この南端の柱から約1.4m、S A 4850から北へ7.2mのところ、地山を約15cm程削って段をつけている。この段の方向はS A 4850とほぼ平行する。

S A 4845 西院伽藍方向にほぼ平行する8度30分西偏する柵列で掘立柱掘り方を3個検出した。掘り方は80cm×70cmの長方形で深さ約60cm。うち2個に柱の一部が残る。柱径は約18cm。柱の掘り方は灰褐色粘質土で埋め戻されている。この柵列は細殿南柱筋から53.00m、食堂南柱通りから61.35mのところを東西に走り、ほぼ西院伽藍の南回廊線の東延長線上にのる。

## J 安養院前から実相院前まで

安養院前から観音院門前をへて、晋門院門前までのL型のトレンチが第230トレンチ、そこから実相院門前までが第234トレンチである。総延長91.6m（支線6.6mを含む）。この地点は東大門と能石をを結ぶ参道にあたる。この両トレンチで検出した遺構は極めて少なく、出土遺物も多くない。基本的土層は現表土下約25cmは明治以降の盛土で、その下に約20cmの中世以降の遺物を含む土層がある。これは細かくは第39図の写真のように10層以上もの砂質土で、大雨等による自然堆積土である。この下は直ちに火山灰層となる。火山灰層より下は厚さ1m前後の砂や粘土の堆積層があり黒色粘土層となる。

S D 2741 安養院前の石橋から1.2m南側を東西にのびる上幅40m、下幅25m、深さ20cmの素掘溝。

S A 3001 観音院表門前にある幅75cmの築地の基壇と考えられる自然石を二列に並べた南北方向の石列。現表土下約8cm。





第38図 安養院から晋門院へ(東から)219トレンチ

S A 3002 晋門院表門の東約3mのところの南北方向の築地基壇。自然石を幅約40cmに並べる。現表土下約20cmで検出。

S A 3003 現在の実相院表門の東側に参道を横切る石列がある(A期)。これは子院界を示すものである。A期の石列の東側30cmに面を揃えた自然石列がある(B期)。B期のものは現地表下9cmにある。

S D 3004 2段の掘り方をもつ上幅3.3m, 中段幅2m, 深さ1.2mの南北溝, 晋門院表門の西側にあるので, 子院界の溝と推定される。出土品には瓦器片がある。

S K 3005 上幅3.5m, 底幅2.7m, 深さ43cmの大形の土壇。出土品はなく, 土取りのための穴のようである。北辺はトレンチ外のため未発掘。

S A 3006 一辺20cm前後の方形掘り方をもつ柵列。11.5mの距離で9個の掘り方を検出した



第39図 観音院前の中世以降の堆積・整地土の分層(東から)219トレンチ

が、近世の仮設物の掘り方である。なお、実相院前から以西には表土、又は表土直下から多くの円形、方形の掘り方がある。これらはすべての祭礼時の仮設物に伴うものである。

S K 3007 一辺3 mの大形の土壌の一端を発掘したが遺物はない。S K 3005と同性格のものか。

S K 3008 S A 3003の下層にある近世初頭の瓦を投げ入れた土壌。この土壌の底の一部は火を受けて赤褐色に硬化している。

その他 この両トレンチとも既述のように地山は浅く、その上面に火山灰をもつが、この直上から、いく点かの若草伽藍の丸瓦片が出土している(219トレンチB区、H区)。なお、両トレンチの位置は若草伽藍の講堂ないし、僧房推定地であるので細心の調査を進めたが、関係する遺構は検出しなかった。

## K 実相院門前から弥勒院前まで

実相院表門前から弥勒院の東土塀際までの72 mである。この地区のトレンチは幅1.5 mで調査を開始したのであるが、若草伽藍関係の遺構調査や、検出した主要遺構が旧河道や人工河道であったのでトレンチ壁の崩壊防止のため、トレンチを拡張した結果、発掘面積は187 m<sup>2</sup>に達し、拡張トレンチに各々トレンチ番号を設定したのでトレンチ数は5個(250, 254, 255, 257, 256)を数えるに至った。ここでは一括して説明を加えよう。若草伽藍関係遺構についてはⅣ章でまとめるので、ここでは諸元を述べる程度にとどめる。

S D 3501 表土層をはずすとあらわれる上幅1.2 m、深さ約40 cmの溝。この溝はS D 2140の東肩の一部を破壊している。室町時代、花園院と現実相院との子院界溝か。

S K 3502~3504 S D 3501の東3 mに南北に並んだ瓦片を中心とする廃棄物を埋めた土壌。S K 3503からは手彫忍冬文軒平瓦片、八葉素弁軒丸瓦片、S K 3504からも手彫忍冬文軒平瓦が出土しているが、近世以降の穴。

その他。この地区では現表土(昭和55年に砂利入れをする)を除去した層にはじまり、厚さ約30 cmの表土層のいずれの分層にも実に多数の方形、円形、大小さまざまな穴がある。これらはすべて、この参道に、聖霊会の期間中、昭和40年ぐらいまで出していた見世物小屋等の杭や柱のあとである。トレンチ西方の第250トレンチR・S地区では銅鋅が出土し、輸入陶磁器片も出土している。

S A 3555 若草伽藍西側の柵列、掘立て柱の掘り方を3個検出した。掘り方は80×90 cmの長方形で深さ約60 cm。柱間隔は2.7 mである。3個検出した掘り方のうち中央のものには現存高44 cmの柱根が残っていた。直径は現在15 cmを計るが、表面の腐食を考慮すると径25 cm程に複元できる。北側の掘り方の中央部には、柱痕の空洞が残り、底に木片があった。空洞の上部には洗濯板状整形平瓦片があり、これをとると空洞があらわれた。柱痕直径は24~23 cmである。南のものは掘り方内には柱痕跡のみが残っていた。推定複元柱径23 cm。この3本の柱を結ぶ線は方眼北に対して約20度西偏する。計算上は北限の柵S B 4850の西端とはS A 3555





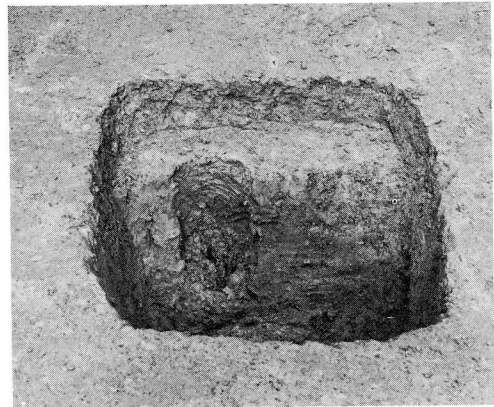
第40図 若草伽藍によって埋め立てられた自然川 S D 2140 (西から)。トレンチ拡張前の写真



第41図 S D 2140の西側に掘られた川 S D 3560。手前は S D 2140の西岸。(東から)。トレンチ拡張前の写真

の北端から21.5mのところでは交差する。なお、この地点は鏡地の池中である（柱数にして8本）。なお北柵列と西柵列は50分の1程度の図上では正しく直交する。

S D2140 本年度の調査において東室北側で、その上流を、昨年度の第128・129トレンチにおいても検出した旧河道である。河道に対していく分斜交してトレンチを設定し、断面図を作成しているの、旧河道の川幅については確定的ではないが、約14.5mである。その方向



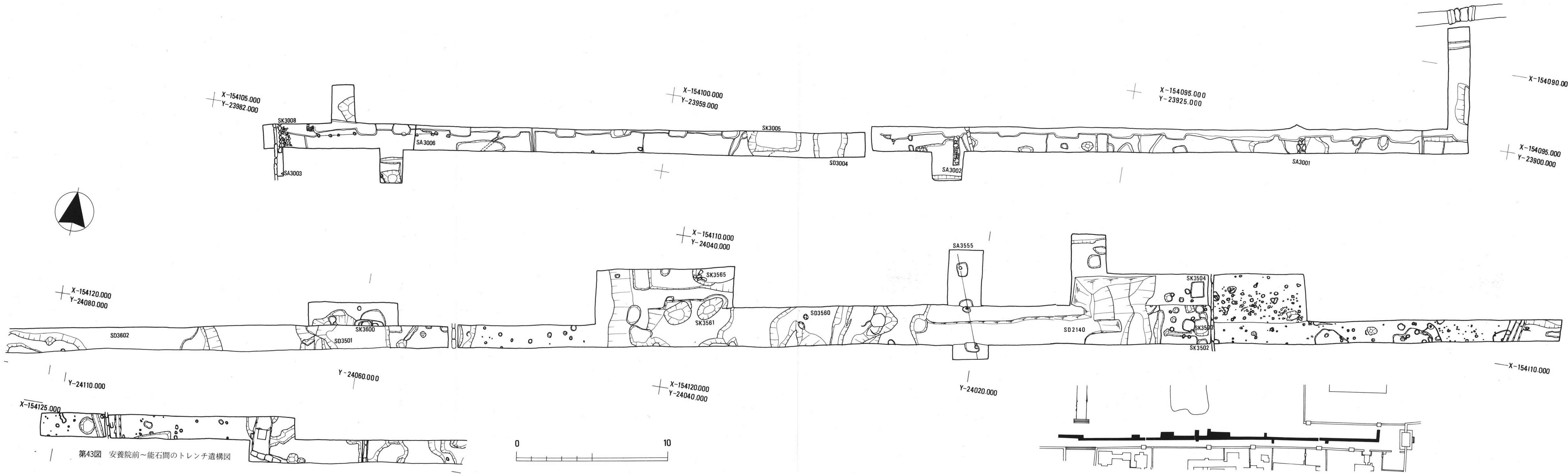
第42図 若草伽藍西柵列(S A 3555)上・南からみた柵列、中央の左右の低みは埋めたてられていた自然川S D2140。下左・柵列の柱根。下右・柱痕。(250, 255, 257トレンチ)

は方眼北から約15度東である。東岸肩の標高は54.3m。東岸はゆるやかな傾斜で約1.4m落ち、そこから急に約1mおち込む。川の深さは最深部で2.5m程を計る。溝の堆積土は大別2層あり、さらに埋め立て土がある。溝の底部には青灰色粘土がある。この粘土は粗砂を多く含み含水性が高く、非常に軟弱である。この粘土層中より大量の木屑片が出土し、少量の須恵器・土師器片が混じる。これらの木屑は東岸に多く、西岸近くではほとんど出土しない。このことは木屑が東岸から投棄されたことを示している。旧河道の一段目の底の平坦な部分から、急傾斜する肩にかけてはアシなどの水草の根や茎幹が多数あり、根株から茎幹が立ったものもあった。一段目の傾斜面に馬骨が、根株にひっかかったようにあった。この溝を茶褐色粘質土等でもって埋め立て整地している。この整地土には少量の銅鋳や洗濯板状整形平瓦片が入る。そしてその整地土を切り込んで、S A 3555の柱掘り方が掘られる。この整地土の上面は海拔54.2～54.3mである。

S D 3560 S D 2140を埋め立てると前後して、開掘された人工の川である。今回の調査トレンチではS A 3555から西へ3.8mのところはS D 2140の西肩であるが、この部分から西側へ開掘する。溝底には黒色の粘土層が露出する。溝東肩から8.2m西は溝底の海拔が53mである。この地点から西へは溝底、つまり地山天はグラグラと立ちあがっていく。掘り込の明確な東肩では、ほぼ方眼方位にあうが、発掘幅が下幅で2mであるので、確定的ではない。西肩は東肩ほど明確でないが、溝幅は約10mである。溝底の東岸よりに幅約1m、深さ15cmの溝底溝がある。この溝の底と、埋土からは大量の瓦、土器、埴輪片が出土している。溝底からは炭化物、土師器、須恵器片、八葉素弁軒丸瓦、洗濯板状整形平瓦片、漆のしみた布片などが出土する。須恵器のうちには硯に転用された坏なども出土し、埴輪片は、破片が大きい。この溝の埋め土は大別3層あり、上から茶褐色粘質土、茶褐色砂質土、灰色粘土である。茶褐色砂質土の表面には雨水が自然に流れていく条かの自然の溝の跡がある。最上層の茶褐色粘質土は厚さが10～30程で部分的に厚薄があり、S D 2140埋め土、S A 3555等の上面をも一様に覆う。この層中には若草期の瓦片にまじって、西院創建瓦を含み、この整地が西院造成

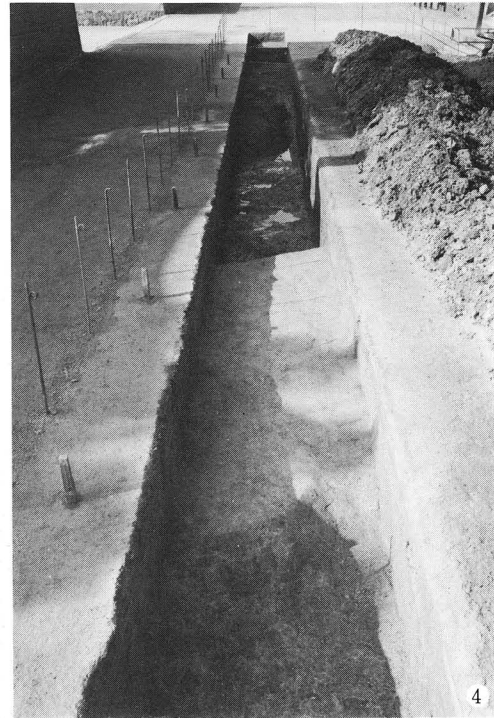
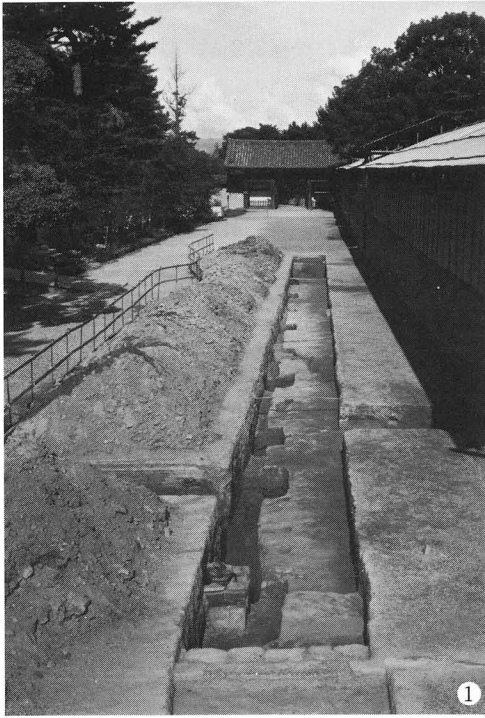


第44図 S D 2140の東斜面の獣骨  
(ウマの左側上腕骨など。)



第43図 安養院前～能石間のトレンチ遺構図





第45図 東大門から能石まで①実相院～晋門院(西から)224トレンチ。②能石～実相院(西から)251・258トレンチ③実相院～花園院(東から)250トレンチ④弥勒院前(東から)251トレンチ

の時期で、かつそれと関係していたことを示している。

S K 3561 S D 3560の西岸付近にある長楕円形の土壙である。長径2.2m、短径1.4m、深さ1.5mの非常に深い土壙で、須恵器甕、壺、土師器高坏等がぎっしりと詰っていた。

S K 3565 東西2.6m、南北1m以上（トレンチ外のため未完掘）、深さ25cm以上の大土壙に5本の丸瓦がほぼ完全な形で埋まっていた。3本は凸面を上向け、2本は凹面を上向けていた。この土壙からは他に出土品がない。この土壙の上部にはひとまわり大きい浅い土壙S K 3566があり、瓦器、瓦製火鉢などの破片を含むので、室町期より古い土壙であるが、土層からはS K 3566によってS K 3565の掘り込み天が破壊されているので、完形丸瓦の集積の意味とともに明確にしがたい。

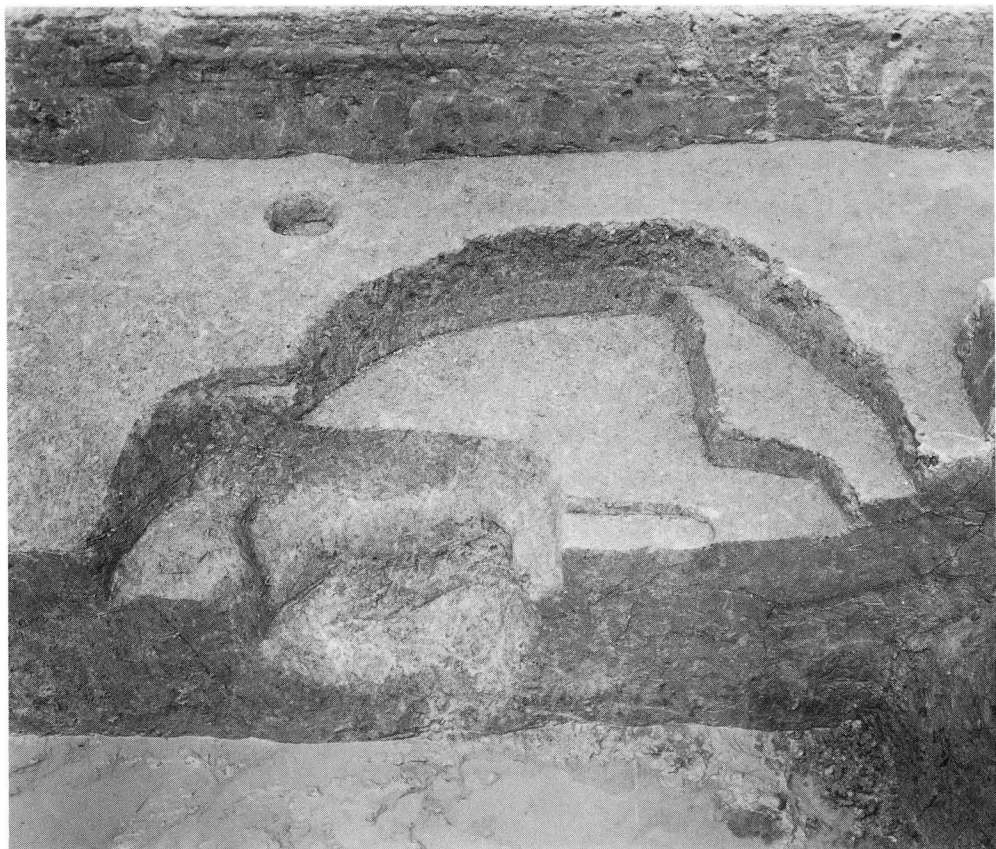
その他S D 3560の西岸ちかくでS K 3565の東南には多くの溝状の凸凹や、小土壙があり、名々出土品がある。このあたりは地山天がS D 3560の東岸部よりも、もともと低くかったようである。

#### L 弥勒院前から能石階段下まで

弥勒院前から西院手水舎までは直線で約34mある。そこで、旧管接続のため鍵の手に折れ曲った。発掘延長は42mとなった。この地区は基本的に地山は表土下30～40cmにあるが、その間に旧谷状地形を埋めたところもあって凸凹のはげしい地形となっている。この地区で検出した主要な遺構は地鎮具を納めた土壙と、旧地形の谷の落ち込み、および中・近世の



第46図 SK3561の全景(西南から)250トレンチ



第47図 土壙の北半分(南から)。下・土壙を覆っていた瓦群



土壌である。

S D 3601 弥勒院門前で検出した北東から南西方向に開く上幅7.6m程度、深さ1.5m程度の旧河道跡。灰黄色粘質砂土で埋め立てられ、その上を褐色土で整地される。この谷は流路のその方向から第45トレンチの手水舎付近の地山の落ちに連なるようである。

S K 3600, S D 3601の東岸部に掘られた地鎮具を納めた土壌は上幅約1.2mの円形で、その中にさらに上幅90cmの断面円錐形の穴を掘る。この底ちかくに、土師器坏をほぼ水平に二個合せ大と墨書された方を下側として置く。この埋土は灰黄褐色粘質土でよく固められていた。埋め戻したうえに、さらに黄褐色土をおき、その上面に瓦片を乱雑に並べるが、とくに土壌のま上には瓦片を径90cm程あつめていた。瓦群は現地表下約70cmに位置する。

S D 3602, S D 3601の西側にある谷状地形である。自然の地形の凸凹で、灰褐色粘質砂土等によって埋めたてている。谷の底の泥土および埋土から西院創建瓦・土器片が出土する。谷の方向は西北より南東にのびるようである。谷の底は現地表下2.5m以上にあり来完掘である。

その他 中門と南大門を結ぶ線上を発掘したが、古代の参道等の遺構は検出しなかった。能石より少し西側では地山まで達する土壌群があるが、これには現明王院の護摩堂の元禄時の祝融によって生じた瓦類を投げこんでいた。



第48図 SK3565の瓦出土状態(西から)254トレンチ

## 2. 東院地区の調査

東院地区では、回廊外側をめぐる導水管予定地及び絵殿・舍利殿と伝法堂の東側、伝法堂の北側で発掘調査を行なった。トレンチ幅は原則的には1.5mである。しかし、伝法堂北側においては、伝法堂解体修理にともなって、昭和14年から15年にかけて行われた発掘によって、斑鳩宮跡の遺構の存在が明らかになっているため、導水管埋設位置を決定する意味あいから、トレンチ幅を3mで計画した。また、検出した遺構の性格を明らかにするために、トレンチを一部で拡張したところがある。

検出した遺構は古代から近世にわたり、斑鳩宮の方位に一致する掘立柱穴列、平安時代の井戸、鎌倉時代の瓦窯などが主要な遺構である。

### A 伝法堂・絵殿及舍利殿地区の調査

i 第217, 218トレンチ 旧導水管埋設位置に幅3mでトレンチを設定し、遺構の検出によって主として東辺部を拡張した。検出した主要な遺構は掘立柱列3、溝1、井戸3などである。

S A 2517 伝法堂の北4mの位置で検出した東西小柱穴列であり、伝法堂解体修理工事の際の足場穴である。

S A 2500 伝法堂の北4.5mの位置で検出した東西掘立柱列である。掘形の大きさは一定でない(0.8×0.8~1.2×1.0m)。すべてに柱痕跡が認められるわけではないが、柱間寸法は2.7m等間である。

S A 2506 S A 2500と重複する2個の掘立柱穴である。掘形の大きさは一定でない(0.8×0.8~1.1×0.7m)。柱間寸法は2.4mである。

S D 2511 伝法堂の基壇北縁に沿う素掘りの溝(幅2.4m、深さ1.0m)である。溝底の幅は0.85mであり、両壁面とも急斜面で掘られている。溝は、伝法堂の西北隅で西南へ方向を変える。一部は伝法堂基壇下にかかるようである。遺物はきわめて少なく、埋土から瓦器片が出土したのみである。

S E 2509 発掘区のはば東端で検出した正方形の井戸。旧導水管の掘形やコンクリート暗渠などの後の攪乱によって一部が破壊されているが、掘形の一辺は1.8mに復原できる。井戸は、掘形の底に幅23~24cm、厚さ20cmの切石を方形の枠に組んで基礎とし、その上に瓦を120段以上、約4.1m積み上げている。瓦は平瓦を主体としているが、丸瓦や軒瓦も含んでいる。検出面からの深さは4.3mある。使われた瓦は奈良時代から平安時代前半のものである。

S E 2511 発掘区西辺部で検出した円形の井戸。円形掘形(直径1.6m)の中に瓦を円形(内径0.7m)に積み上げて井戸枠としている。底に曲物の側板(直径0.5m、高さ0.2m)を2段据えている。検出面からの井戸の深さは1.7mである。

S E 2560 発掘区西端で検出した井戸。正方形の掘形(1辺上縁で1.9m、底で1.3m)を掘り、



第49図 東院伝法堂北側の調査地全景(上・東から，下・西から)217トレンチ



第50図 東院伝法堂北側トレンチ東端部細部(上・東から, 下・西から)



瓦質の井筒（直径50cm、高さ42cm）を井戸枠として重ね積んでいる。3段残っていた。検出面からの深さは1.9mである。

## ii 第212トレンチ

絵殿及び舍利殿の東方から伝法堂東辺部に埋設されている旧導水管に沿って、幅1.5mのトレンチを設定して調査を進めた。検出した主要な遺構は土壇2，瓦窯2である。

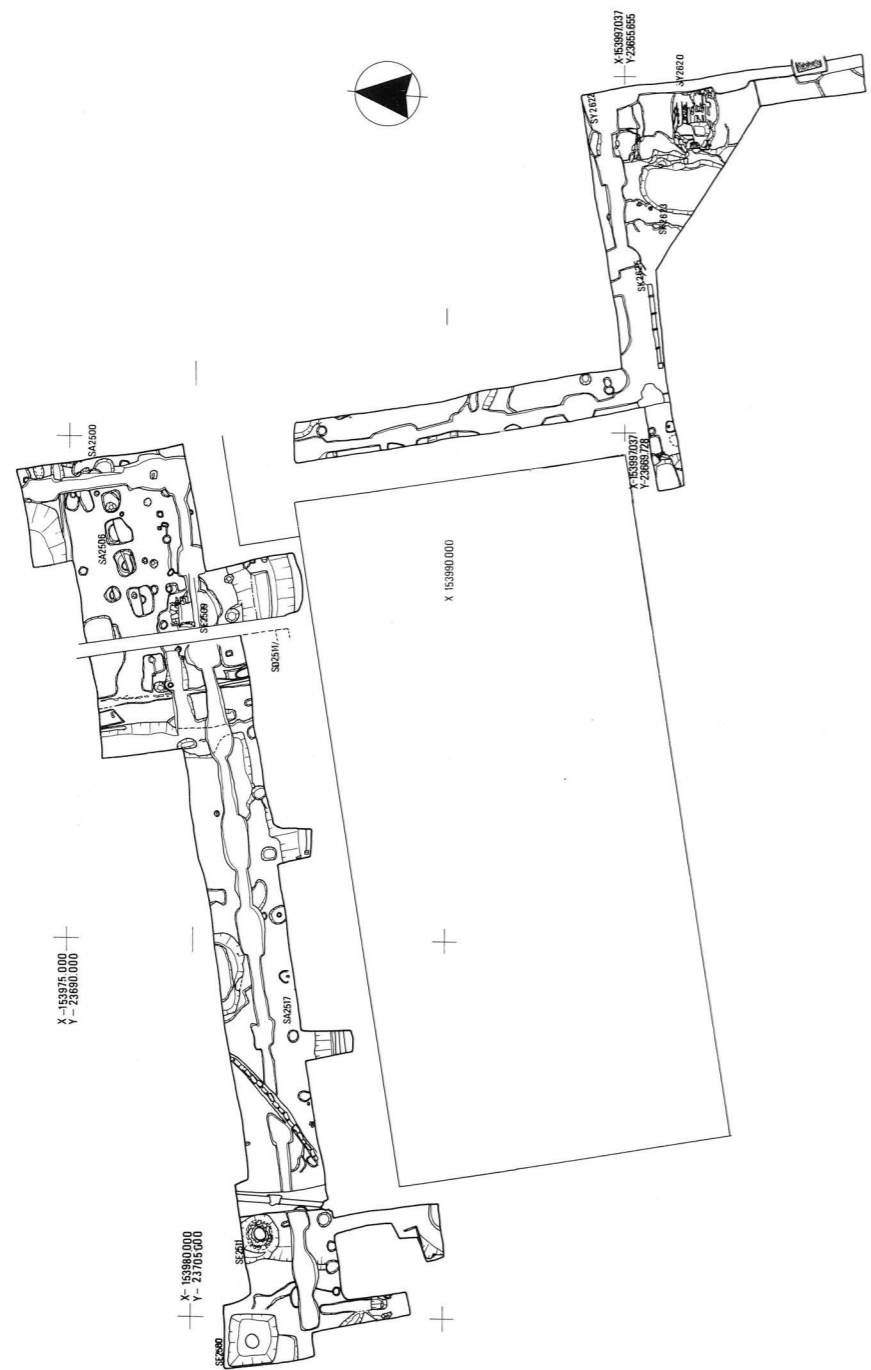
S Y 2620 分焰牀をもつ平窯である。焚口及び燃焼室は後世の破壊がいちじるしいため、その構造を知り得ない。焼成室は、分焰牀の基部までがかるうじて残っている程度である。焼成室の奥壁は、旧導水管の埋設時にごく一部を残して破壊を受けている。焼成室の幅は1.3m、奥行1.2m以上である。しかし、燃焼室の床面の一部が、分焰牀の前面0.3mの位置でわずかに認められるので、その間に燃焼室と焼成室との隔壁をおけば、焼成室の奥行は1.5m以上にはならない。焼成室内に残る分焰牀は3条で、丸瓦と平瓦とを組合わせて築いている。上部が削られているので、高さはわからない。燃焼室断面の所見では、都合4期分の床面が認められた。当初、瓦器片（12世紀代）を含む整地土を船底形に掘りくぼめて床面を築く。第Ⅱ期は土を盛り足して同じく船底形に築く。第Ⅲ期と第Ⅳ期はさらに土を盛り足すが、ほぼ同じレベルであり平坦にする。焚口の前面には灰原があり、楕円形のくぼみに焼土が堆積し、瓦片を多量に含んでいる。出土した瓦の中に蓮華唐草文軒平瓦（第7表174D）と「法隆寺」銘軒平瓦（第5表191A）が見られた。瓦窯の築造は、鎌倉時代の可能性が十分に認められる。

S Y 2622 S Y 2620の北2mの位置に築かれた平窯であるが、焼成室の西南隅と思われる一部を残して、旧導水管埋設時にほぼ完全に破壊されている。西側に、燃焼室と思われるくぼみが認められるが明確でない。

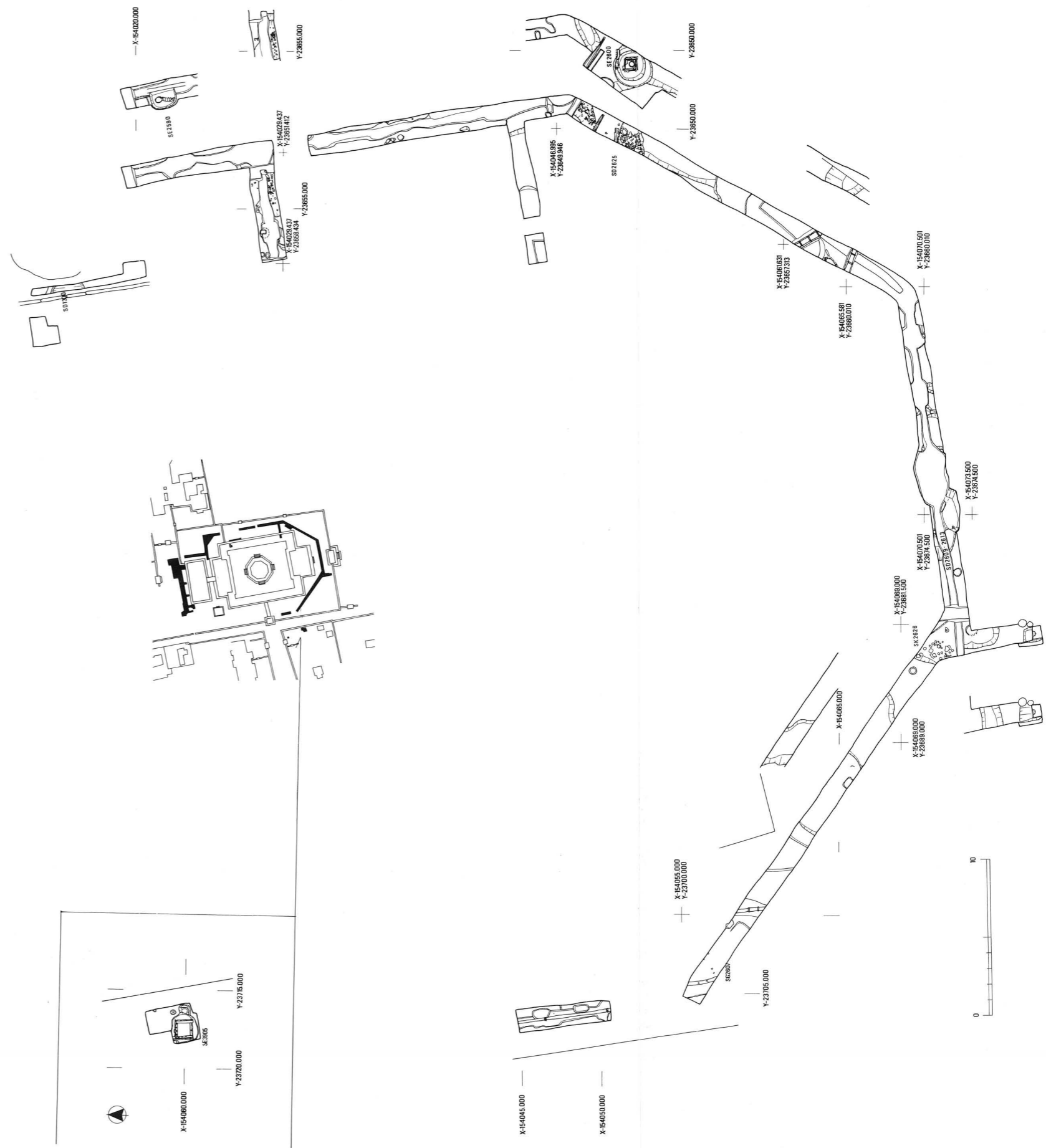
S K 2623 窯跡の西にある浅い（深さ0.2m）土壇である。この地域は西に下がる傾斜のため、土壇の西壁は検出されなかったが、直径2m以上の不整円形を呈すると思われる。埋土から土器片が出土しているが、小片のために年代を決め得ない。



第51図 東院伝法堂北側の中世井戸 左・S E 2569(南から)、右・S E 2509(西から)



第52図 東院の遺構図





第53図 東院伝法堂東側の瓦窯S Y 2620とS Y 2622(西から)212トレンチ



第54図 瓦窯S Y 2620の全景(西から)



S K 2625 S K 2623 西北の小穴（直径0.5m）である。埋土中から土師器皿，瓦器皿が多量に出土した。13世紀代のものである。

## B 回廊外側地域

i 第204, 209トレンチ 東面回廊の東側に設定した南北トレンチである。トレンチのほとんどが旧導水管埋設時の掘形で占められていたが，溝，土壇，井戸などを検出した。

S D 1300 1982年度に検出した溝の延長部である。トレンチの幅は，東側の龍神池に規制されて0.4mであったが，上縁幅2.1mの断面V字溝を検出した。深さ1.8mである。溝の検出面は，現地表面から0.5mあり，地山である。埋土内から遺物は出土しなかった。

S E 2590 龍神池に近接して検出した井戸。掘形南半は旧導水管埋設時に破壊されている。円形掘形（直径1.7m）の中央から北に寄せて瓦質の円形井筒（直径40cm，高さ42.5cm）を3段据えている。検出面から井戸底までの深さは2.78mある。井筒埋土から木彫如意輪観音小像を納めた金銅製容器や，青銅製塗香器が出土した。

ii 第205, 206, 207, 208トレンチ 回廊東南隅外側から，礼堂と南門の間を経て，回廊の西南隅外側及び西面回廊の外側に至るトレンチである。後世の攪乱がいちじるしいため，東院造営時の盛土の厚さを知ることはむづかしかったが，第207トレンチでは，現地表面下約1.7mの深さで古墳時代の遺物を含む堆積層を検出した。この堆積層の上面が東院造営時の地表面にちかい高さ（海拔高約50.3m）になるかもしれない。この地域は，古代以降近代に至るまで，常に地下の掘さくが行われており，今次の調査では，S E 2600の南6mで検出たくぼみから「昭和13年」銘の平瓦が出土しているほどである。検出した主要な遺構は溝，土壇，井戸などである。

S D 2625 回廊東南隅外側で検出した南北溝（幅0.9m，深さ5cm）である。溝内には多量の瓦が堆積し，中には古代と中世の瓦が混在している。

S E 2600 S D 2625の南に近接して検出した井戸。円形の掘形を2段（直径は上段2.5m，下段1.9m）に掘り，縦板組みと横板組みとを併用した正方形の井戸である。底には曲物を2段（上段直径42cm・高さ10cm，下段直径39cm・高さ19cm）据え，その上に曲物を取り囲む形で，石と埴を2段積んでいる。板組みは上段が縦板組みで，下段が横板組みである。縦板は各辺3板（幅25～30cm）並べたてる。板の上部は腐蝕がいちじるしいため長さはわからない。横板幅25cm，長さ85cm以上）は1段のみであり，上段と下段との境いには1辺8cmの角材を枠に組んでいる。検出面からの深さは約1.5mである。埋土から出土した瓦から，室町時代の井戸と考えられる。

S D 2609・2613 礼堂のほぼ正面で検出した南北溝である。S D 2613（幅2.3cm，深さ0.3m）は真直ぐ南流し，S D 2609（幅1.7m，深さ0.2m）は東北方面から西南方面に流れる。両溝は近接しており，トレンチの南側で直ちに合流するものと思われる。埋土から奈良時代と平安時代の瓦が出土している。



第55図 東院の調査。①龍神池西(南から)209トレンチ ②東回廊の東(北から)204トレンチ  
③東回廊東南(北東から)205トレンチ ④西回廊西南(北西から)207トレンチ



第56図 東院南門の西側南北トレンチ地山面(北から)208トレンチ



第57図 東院伝法堂東側南北トレンチ(南から)212トレンチ



第58図 東院東回廊東南外の古墳時代溝(北東から)205トレンチ



第59図 東院龍神池東の井戸 S E 2590(南から)204トレンチ



第60図 東院東回廊東南隅外の井戸 S E 2600(南西から)205トレンチ

S K 2609 回廊西南隅外側で検出した土壌。埋土から出土した瓦類によって江戸時代の土壌と考えられる。

S D 2613 S D 2659の下層で検出した東西溝（幅0.6m，深さ0.2m）である。検出面の海拔高はS D 2609・2613とほぼ同じである。

S D 2614 S D 2613の西5 mの位置で検出した南北溝であるが，性格不明である。

S G 2607 第207トレンチ西北端で検出した池である。現地表面から1.3mの位置にあり，東岸と西岸を検出したが，岸の方向は北方に開いているので，池の南端ちかくを検出したものであろう。検出面からの深さは0.2mである。埋土中から違鍵紋軒丸瓦が出土している。これは丸目結紋や葵文の軒丸瓦が使われた頃のものであり，江戸幕府5代將軍徳川綱吉の時にあたる。したがって，この池も近世に営まれたものである。



第61図 東院伝法堂基壇北側の大溝S D 2511（東から），この溝の南側肩は伝法堂昭和解体修理に伴う調査で，その一部が検出されている。



### 3 中間地区の調査

善住院地区(第231・222トレンチ)では、火災警報装置用ケーブル及び電線埋設に先がけて、試掘のためにトレンチを設定した。

また、羅漢堂の北地区(第211トレンチ)、中道院表門の南西地区(第220トレンチ)では、新管理設予定地にトレンチを設定して、調査を行った。

#### A 羅漢堂北地区(第211トレンチ)

第125トレンチに南接する東西1.5m、南北8.2mのトレンチを設けた。検出された遺構は、東西にのびる溝2条、土壇8基である。

S D 3903 トレンチ北半で検出した二条の溝のうち、南の東西溝(幅約1.1m、深さ約15cm)で、横断面が皿状のものである。

S D 3901 S D 3903の北側に並行する東西溝(幅約0.6m、深さ約15cm)で、横断面が皿状を呈する溝である。面溝ともに古墳時代前期の土師器小片を含んでいるが、溝は近世のものである。

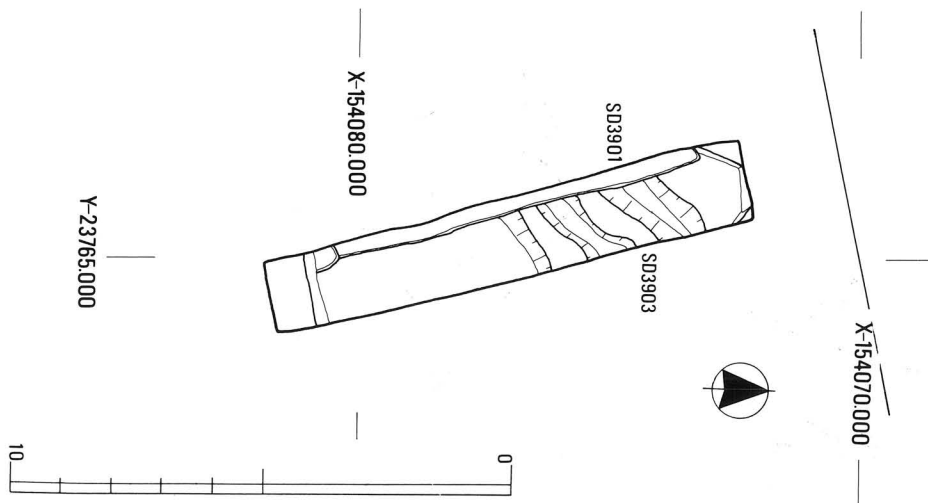
土壇については、その性格は不明である。

#### B 中道院表門北西地区聖徳会館北西隅(第220トレンチ)

中道院表門の南西に、東西3m、南北5.5mのトレンチを設定した。検出した主な遺構には、井戸S E 3900がある。

第126トレンチで検出した若草伽藍の東限と考えられる河川S D 1151の明確な西肩は検出し得なかったが、全体的に砂が堆積し、西へ氾濫したことが判った。

S E 3900 トレンチ中央部で検出した石組井戸。掘形は、上縁で直径約2.1m、底で直径



第62図 羅漢堂北地区のトレンチと遺構図

1.6m、深さ2.4mの規模で、地山の黒色粘土及びその下層の粗砂層を掘り込んでおり、ほぼ中央に横板組みの井戸枠を据えている。枠板は、長さ約43cm、幅約26cm、厚さ約2.5cmの胴木を一段、“追い回し”にした後、その四隅に人頭大弱の石を置き、さらに円形に石を組み上げている。井戸石組は、発掘時に3段を残すのみで、井戸廃絶後に大半をぬきとられている。

井戸埋土内から、土師器羽釜、瓦器羽釜等が出土している。

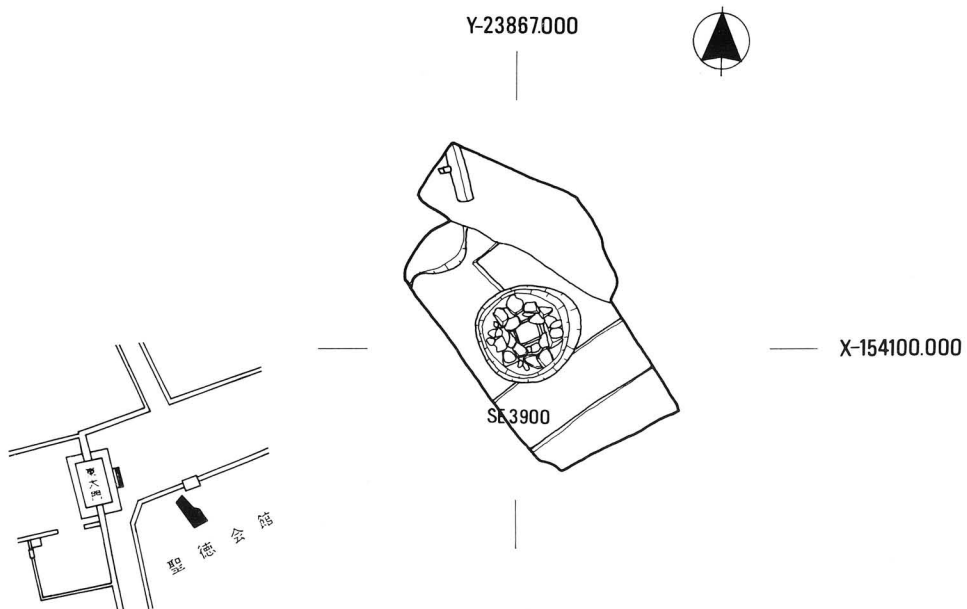
### C 善住院地区（第221、222トレンチ）

善住院表門の南に、東西1.5m、南北2mの第221トレンチと、東側築地沿いに東西1.5m、南北3.8mの第222トレンチを設定した。第221トレンチは、現代のコンクリート基礎による攪乱をうけており、発掘し得なかった。第222トレンチで検出した主な遺構には、井戸S E 3905、埋め甕S P 3906、S P 3907がある。

S E 3905 トレンチ南西部で検出した井戸。掘形は、上縁で東西約1.7m、南北約1.5mの隅丸方形を呈し、深さ約1.6mであり、掘形のほぼ中央に横板組みの井戸枠を据えている。井戸の構造は、まず径約15cmの横棧を内法約80cmに組み、隅柱で固定し、横棧の外側に厚さ4cm内外の板を縦長に組み合わせている。この隅柱と横棧には、<sup>えつ</sup>棧り穴を有する断面八角形の垂木が、転用されている。井戸側板内部から、忍冬素弁軒丸瓦、平安時代の軒瓦、7世紀の土師器杯等が出土している。平安時代後期の井戸であろう。

S P 3906 トレンチ南西部、地表下約45cmの位置で検出した。甕は、近世のものである。便器として利用されたいらしい。

S P 3907 上述のS P 3906の西側で検出。甕の中に土師器片と宋銭一点あった。



第63図 聖徳会館北西隅トレンチ遺構図